HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	19世紀後半のハワイ人のキリスト教受容について : カオナの反乱とホオマナ・ナアウアオの誕生を中心に
Author(s)	井上, 昭洋
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(2), 1-61
Issue Date	1997-01-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33678
Type	bulletin (article)
File Information	45(2)_PL1-61.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 45-2 (1997)

19世紀後半のハワイ人のキリスト教受容について：カオナの反乱とホオマナ・ナアウアオの誕生を中心に

井 上 昭 洋

はじめに …… 3
I．ポリネシアのキリスト教化…… 4
II．ハワイ人のキリスト教史…… 7
(a) 初期の宣教史…… 7
(b) 会衆派教会の歴史…… 9
III．キリスト教に対するハワイ人の反応…… 10
(a) ハプ・カルト…… 10
(b) カオナの反乱…… 11
(c) カオナ一派の教義と活動…… 19
IV．19世紀後半から20世紀初頭にかけての社会変動と会衆派教会 …… 25
(a) ハワイ人の人口変動…… 25
(b) キリスト教各宗派の流入とその活動の増大…… 28
(c) 「古き良き体制」の消滅 …… 29
(d) 伝統的宗教およびカフナの復興…… 30
(e) 非ハワイ人教会の成立とハワイ語から英語への移行…… 36
(f) ハワイ王朝の崩壊…… 37
V．独立系ハワイ人教会の誕生…… 39
(a) ホオマナ・ナアウアオの誕生…… 39
(b) ホオマナ・ナアウアオの初期の教義と活動…… 47
(c) 「ジュビリー・ブック」に見るハワイ文化 …… 49
(d) 独立系教会の変容…… 51

まとめ…… 54

E halelu aku oukou ia Iehova:
E halelu aku i ke Akua, ma kona wahi hoano;
E halelu aku ia ia, ma ke aouli o kona hanohano.
2. E halelu aku ia ia, no kana mau hana maua;
E halelu aku ia ia, e like me ka manomano o kona nui:
3. E halelu aku ia ia, me ke kani ana o ka pu ; E halelu aku ia ia, me ka wiolaumi a me ka lira;
4. E halelu aku ia ia, me ka pahu-kani, a me ka haa ana;
E halelu aku ia ia, me ka pahu kaula, a me ka ohe.
5. E halelu aku ia ia, me na kimebala kani nui;
E halelu aku ia ia, me na kimebala kani kiekie.
6. E halelu aku ia Iehova, na mea hanu a pau; E halelu aku oukou ia Iehova.

(HALELU 150)

1．ハレルヤ。
聖書で　　神を賛美せよ。
大空の砦で　　神を賛美せよ。
2．力強い御業のゆえに
神を賛美せよ。
大きな御力のゆえに
神を賛美せよ。
3．角笛を吹いて　神を賛美せよ。
琴と竪琴を奏でて
神を賛美せよ。
4．太鼓に合わせて踊りながら
神を賛美せよ。
弦をかき鳴らし笛を吹いて
神を賛美せよ。
5．シンバルを鳴らし
神を賛美せよ。
シンバルを響かせて
神を賛美せよ。
6．息あるものはこぞって
主を賛美せよ。
ハレルヤ。

（詩編第 150 節）

E nana oukou ano, Owau, Owau no ia,
Aohe akua e ae, Owau wale no:
Owau ke pepehi, Owau ke hoola;
Owau ke hoeha, Owau ke hoola;
Aohe mea nana e hoopakele ae ma kuu lima aku.

(KANAWAILUA 32:39)

しかし見よ，わたしこそ，わたしこそそれである。
わたしのほかに神はない。
わたしは殺し，また生かす。
わたしは傷つけ，またいやす。
わが手を逃れうる者は，一人もいない。

（申命記 32 章 39 節）

No ia hoi, ke nonoi aku nei au ia oukou, e na hoahanau, ma ke aloha o ke Akua, e haawi i ko oukou mau kino i mohai ola, hemolele, hooluolu i ke Akua; oia ka oukou hoomana naauao.

(ROMA 12:1)

こういうわけで，兄弟たち，神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ，あなたがたのなすべき礼拝です。

（ローマの信徒への手紙 12 章 1 節）

Ka Baibala Hemolele（ハワイ語聖書）より

聖書（新共同訳）より

はじめに

本稿の目的は，ハワイ人が外来宗教であるキリスト教にどのように反応し，自分たちのものとしていったか，さらにキリスト教の土着化において，どのようにハワイの伝統文化が作用したかを考察することにある。ここで対象となるのは，19 世紀中盤に起こった「カオナの反乱」と呼ばれる宗教運動と 19 世紀末に設立された独立系ハワイ人教会「ホオマナ・ナアウアオ」の 2 つの事例である。どちらの運動も会衆派教会内部で始まり，白人主導の教会組織への対立，またはそこからの独立という形をとって表面化した。

本稿は，この2つの運動の詳細な記述を通して，前者の運動が反乱として鎮圧され失敗に終わった過程，そして後者の運動が当時の社会で異端視されながらも宗教組織として確立された過程を追うことに焦点を当てている。どちらの運動もキリスト教受容におけるハワイ文化の発揚としてとらえることができるが，これらの運動を詳細に記述し，また19世紀後半のハワイ社会の変容を考察することで，カオナの反乱が失敗に終わり，独立系ハワイ人教会が宗教運動としてある程度の成功をおさめた理由が明らかになるだろう。

Ⅰ．ポリネシアのキリスト教化

太平洋諸島，特にポリネシアとミクロネシアの島々は，19世紀にキリスト教各宗派がその宣教活動に最も成功をおさめた地域であり，ハワイもその例外ではない。1820年にアメリカからプロテスタントの一派がやってきて以来，ハワイ人の伝統文化は外来文化の影響下，劇的な変容を遂げてきた。その変化は，社会・経済の制度から宗教や世界観といった象徴的なシステムにいたるまで広範囲にわたる。これらの社会や文化の変容は必ずしも全てハワイ人のキリスト教化に起因するものではないが，外来文化としてのキリスト教が彼らの文化に与えた影響は計り知れない。

太平洋諸島地域は，ポリネシア，ミクロネシア，メラネシアの3つの主要な文化領域に分けられる。これらの領域は，外来文化の担い手によって恣意的に分類されたものであり，各領域内の島々の間ではその文化や社会制度に差異が認められる。しかし，ポリネシアの多くの島々，特にタヒチ，ハワイ，トンガなどでは，外来文化と本格的に接触を開始する18世紀後半には階層化の進んだ首長制が確立しつつあり，西洋のキリスト教宣教師達もその社会制度に適応する形でこの地域で宣教活動を展開した。宣教師達がまず最初に首長や王族を改宗させることに力を注いだのは，彼らの承認を得なければ島に滞在することさえできなかったということもあるが，島の社会制度の頂点に立つ彼らを改宗させることによって，その下に統治されている平民を一度に改宗させるという狙いがあったからにほかならない。王族の信頼を得てその

庇護のもと宣教活動を展開するというのが，この時代のポリネシアの島々における宣教師達の基本的な戦略だったのである。

宣教活動の初期の段階において島民のキリスト教化と文明化のどちらに重点をおくかについて，宗派によってその立場に若干の違いがあった。だが，一般に宣教師たちは，極めて早い段階から教会と共に学校を設立して教育にも力を入れた。しかしながら，彼らの意図した教育を通しての文明化とは，島民の西洋化，更に言えば，彼らが本国で属していた社会階級の倫理観に即した文明化であり，彼らの伝えようとしたキリスト教のメッセージも自らの文化を色濃く反映したものであった。この外来宗教に対する島民の反応は，少なくとも外見上は非常に従順に見える教会活動への参加から，キリスト教の要素を部分的に取り入れながらも白人主導のキリスト教勢力に対抗する宗教運動，また，白人中心の組織から独立して自分たちの教会を形成し徐々に独自の神学体系を作り上げていくといった教会の土着化まで，幾つかの形態に分類される。

太平洋諸島地域におけるキリスト教の土着化の多様性を考察する際，島の伝統文化と社会制度，外来文化との接触の程度やその時期，接触の相手国や入った宗派，さらには文化接触以降の政治・社会情勢の変化など，幾つかの要素を考慮する必要がある。シンクレティックな反体制的宗教運動は文化接触の初期の段階に見られ，島民による独立教会の形成は本国の教会組織が島での宣教活動と関係を絶った後に顕在化することが多いが，両者は必ずしも時代的また地域的に明確に区分されるものではない。

従来，太平洋諸島の宗教変容の研究において，メラネシアの宗教運動を語る際によく用いられる言葉は「カーゴ」であった。一方，この概念が当てはまらないポリネシアの宗教運動に対しては「適応 (adjustment)」という言葉が使われる傾向があった (Ralston 1985：308)。これは，両地域の宗教文化の違いによってある程度説明することができよう。メラネシアの伝統宗教において，物質的繁栄の維持がその支配的なモチーフであり，世界は水平的に認識されるものであるのに対し，ポリネシアではコスモスの秩序の保持，個人・集団の保護が宗教的テーマの中心を占め，神話やコスモロジーは比較的

垂直的に構成される（Swain & Trompf 1995：121－126）。そのため，前者においては，カーゴ・カルトと呼ばれる物質的な充足を求めるより政治的な宗教運動が展開されたのに対し，後者では天啓を受けた預言者を中心とする一種の千年王国運動が起こる傾向があった[1)]。

1820年代から30年代にかけて，ポリネシアで展開された島民主導のシンクレティックな宗教運動には，1826年にタヒチに始まり40年代にはソサエティ諸島全域に広がったママイア運動，この運動に触発されたサモア人が30年代にサモアで始めたシオヴィリ運動，また，1833年にニュージーランドで始まったパパフリイア運動などがあげられる。また，19世紀後半には，トンガではウェスレー系メソジスト派教会が，サモアでは会衆派教会が，島の社会制度に取り込まれる形で定着し，一方，ニュージーランドではマオリの預言者が始めた宗教運動が20世紀に入ってラタナ教会，リンガトゥ教会などの独立教会として確立した（cf. Garrett 1982；Howe 1984；石森 1982）。

ここでは，これ以上詳細に太平洋諸島の文化接触以降の宗教変容を比較することはできないので，次の二点を述べるにとどめたい。第一に，この広大な地域でキリスト教との接触によって起こった宗教運動は，ある程度，文化領域ごとに（特にポリネシアとメラネシアの間で）類型化できるということ。第二に，同じ文化領域内でも運動の展開の仕方には違いが見られ，その違いを生んだ様々な要因を考察する必要があること。本論文は，第二の点に関わっており，ハワイにおける島民の宗教運動がキリスト教の影響化どのように発生し発展したのかを考察することになる。

1）カーゴ・カルトも千年王国運動の一つとしてとらえられることが多い。また，メラネシアのカーゴ・カルトとポリネシアの千年王国運動という対比は，研究者が前者の運動により「カーゴ・カルト」的要素を認め，後者の運動の中心に一人の預言者を見いだそうとする視点が生み出したものと考えることもできる。特にカーゴ・カルトの概念については，近年それを見直す動きがある（cf. Lindstrom 1993）。

II．ハワイ人のキリスト教史

(a) 初期の宣教史

1819 年 5 月にそれまでハワイ諸島を統治していたカメハメハ 1 世が死ぬと，その息子であるリホリホがカメハメハ 2 世として即位した。即位後，彼がまず断行したのは様々な禁忌を課した伝統的宗教体系であるカプ制度の廃止であった。同年 11 月，彼が男女同席の祝宴を開いて，食事の際の男女の同席を禁じたカプ（'ai kapu）を放棄し，公式にこの伝統的な制度の廃止が告げられた。以降，多くのヘイアウ（神殿）や神々の像など，伝統宗教に関わる施設や物品が破壊，廃棄された。1820 年 3 月，アメリカからプロテスタントの宣教師達がハワイにやってきた時，ハワイ社会はこの伝統的宗教制度の崩壊の結果，宗教的空白・混乱状態に置かれていたのである。

ところで，18 世紀後半に合衆国のニューイングランドを中心に起こった信仰覚醒運動が，やがて全世界へ向けての伝道運動に発展し，19 世紀初頭に会衆派（Congregationalist）と長老派（Presbyterian）を中心に組織されたのが「アメリカ海外伝道評議会（ABCFM：the American Board of Commissioners for Foreign Missions)」であった。1820 年に初めてハワイにやってきた宣教師達はこの ABCFM によって派遣された一団であり，以後，1848 年までに計 12 回の宣教師団が派遣された。今日に至るハワイ人のキリスト教史はこの宗派を中心に展開する。

一方，カトリック勢力，特にフランスのカトリックが本格的にハワイで宣教活動を開始するのは，1827 年に伝道団が派遣されてからのことになる。しかし，当時政治的中枢にいたカアフマヌ王妃をはじめとする多くの王族達はすでにアメリカ人宣教師によってプロテスタントに改宗しており，カトリックの伝道団は彼らの協力を得ることができないばかりか，布教活動の禁止や島外への退去を命ぜられたりした。以後，伝道活動は継続されるものの，1839 年に弾圧が緩和されるまで，反カアフマヌ勢力の王族を含むハワイ人のカトリック信徒は反カトリック政策のもと迫害された。

1850年，第3の宣教師団である末日聖徒イエスキリスト教会（モルモン教会）が宣教活動を開始する。モルモン教の宣教師達は，白人人口が予想していたより少なかったため，布教の対象をハワイ人に変更し，教会内の様々なポストに初期の段階からハワイ人を登用して，積極的に伝道活動を展開した(Kuykendall 1938：344)。しかし，本国の教会組織と合衆国政府との関係が悪化したため，1858年に白人宣教師は本国に撤退してしまう。以降，1864年に改めて宣教活動を開始するまで，ハワイにおける活動に混乱が生じたが，モルモン教宣教師はフラなどの伝統芸能に比較的寛容であり，また，ポリネシア人は古代ヘブライ人の子孫であるというこの宗派独自の教義もてつだって，彼らはハワイ人の間に信徒を獲得していく。

次にハワイで宣教活動を開始したのは，英国聖公会（the Church of England)である。その宣教師団は1862年に本格的に始動し，当時，カメハメハ4世が反米的な立場をとっていたこと，英国聖公会の王室観がハワイ王朝に適合的であったことなどから，一部の王族を教会のメンバーに迎え入れることができた。しかし，ハワイはすでにプロテスタントとカトリックの両勢力が地盤を固めた後であり，またモルモン教も着実に信徒を獲得していた時期でもあったので，期待通りに伝道活動に成果をあげることができなかった。そして，1902年にはハワイにおける宣教活動は英国から合衆国の教会組織(米国聖公会：the Protestant Episcopal Church of the United States of America）の管轄となった。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて他のプロテスタント宗派も活動を開始するが，以上の4つの宗派がハワイ人のキリスト教化に最も多くの影響を与えたと考えられる。ところで，ハワイ人のキリスト教化を考える際，これらの教会に加えて見逃してはならないのが，白人主導の会衆派教会から分派したハワイ人の独立系教会である。また，この独立系教会が成立する以前にもハワイ人がキリスト教を自分たちのものにしようとする幾つかの動きがあった。そのような運動も含めてハワイ人主導のキリスト教受容について考察する前に，その背景となる会衆派教会の19世紀の歴史について概観したい。

(b) 会衆派教会の歴史

1820 年に ABCFM の宣教師達が来島したとき，すでにハワイ諸島は一つの王朝のもとに政治的に統一されており，伝統的宗教制度であるカプ制度が廃止され，島民達は西洋人との接触を重ねていて英語も多少なりとも理解できる状態にあった。また，宣教師達も先にタヒチで宣教活動を開始していた「ロンドン伝道協会（LMS：the London Missionary Society)」の経験から多くのことを学びとり，ハワイ語に極めて近い言語であるタヒチ語に精通したＬＭＳの宣教師の協力なども得ることができた。以上の点で，ABCFM の宣教師達は宣教活動を開始するにあたって，絶好の条件下にあったといえる (Howe 1984：170)。彼らはハワイ語をアルファベット化し，印刷機を導入してハワイ語聖書や教科書を出版，各地に学校を設立して，ハワイ人の教育に力を入れた。この教育活動はカアフマヌを初めとする王族に支持され，1831 年には全島でその学校数は 1,100 に達し，生徒数は 52,000 人にのぼった (Kuykendall 1938：106)。

しかしながら，宣教師達の本来の目的であったハワイ人の改宗は，1837 年の時点でその信徒数が 1,049 名であり，教育面の成果と比べるとそれほど目を見張るものではなかった。これは，島民の外来宗教に対する興味が低かったからではなく，厳格なカルビン主義者であった初期の宣教師達が彼らを教会の正規メンバーとして受け入れることに過度に慎重であったためである (Kuykedall 1938：114)。しかし，本国組織からの助言もあって，幾つかの教会はハワイ人信徒の受け入れに対して徐々に寛大な方針をとるようになり，1837 年から 40 年にかけてハワイ島のヒロを中心に起こった「信仰大復興 (the Great Revival)」の素地を作ることになる（cf. Daws 1960)。

この信仰復興を契機に，会衆派教会は急激に信徒数を増加させて着実にハワイ人の間に浸透していき，1852 年からマルケサス諸島やミクロネシアの島々にハワイ人の伝道師を派遣するまでになった（cf. Morris 1987)。また，1823 年に ABCFM と LMS の宣教師達によって組織された「ハワイ協会」は，1854 年に「ハワイ伝道協会 (HEA：the Hawaiian Evangelical Association)」と改名して，協会の門戸が一般信徒にも開かれた。そうして，1863 年，

本国組織のABCFMは，ハワイのキリスト教化が完了したものとみなし，ハワイへの宣教師派遣を中止して経済援助を打ち切った。その結果，HEAは独立組織となり，新たに評議委員会（the Board of the Hawaiian Evangelical Association）を設置し，各教会も徐々にハワイ人牧師が監督を任されるようになる。一般に，太平洋諸島のキリスト教伝道史では，本国組織に管理された宣教活動から島中心の教会活動に移行する時期が一つの重要な転換点であるが，ハワイにおけるその転換期は，1854年から1863年の間にみることができる。

こうして，19世紀の後半は，徐々にではあるがハワイ人の牧師が各地の会衆派教会を監督するようになった（Kuykedall 1953：101）。しかしながら，ハワイ人牧師が必ずしもキリスト教社会内でリーダーシップを握ったわけではなく，例えばＨＥＡの評議委員会の主要メンバーは白人牧師が独占し続けた。また，会衆派教会のオピニオン紙である「フレンド（The Friend）」は，ＨＥＡの幹部を中心におよそ25名がその編集に携わったが，そのうちハワイ人は1名にすぎなかった（Gallagher 1983：12）。彼らが教会内部で指導的立場につけなかった理由には，第一に，宣教師達のハワイ人とその文化に対する低い評価，および，その温情主義的な態度があげられるが，ハワイ人牧師に対するハワイ人一般信徒の態度も考えなければならない。彼らは，それまで教会を指導していた白人宣教師に代わってハワイ人牧師を自分たちの指導者として受け入れることに積極的ではなかったのである（Gallagher 1983：27－30）。

Ⅲ．キリスト教に対するハワイ人の反応

(a) ハプ・カルト

このように白人宣教師の指導のもとに活動を展開していたキリスト教教会に対するハワイ人の反応はどのようなものであったのだろうか。Ralston（1985：316）も指摘するように，1820年代から30年代にかけてのハワイ人は，島社会内の政治的抗争，圧倒的な西洋物質文明の流入，宣教師達の土着

文化に対する態度などの面で，ほぼ同時代のタヒチ人，サモア人，マオリと似通った状況に置かれていた。そのため，社会的に優勢となってきた白人に対する島民の反応として，ハワイにおいてもポリネシアの他の島々と同様に，20 年代から 40 年代にかけて土着の神であるロノやペレの化身を名乗る預言者や信仰治療者が出現した (Beaglehole 1937，Burrow 1970 [1947])。しかしながら，19 世紀のハワイを総じて見れば，強力なリーダーシップを持った預言者または指導者の一団によって統率された組織的な抵抗運動や宗教運動が，全諸島にまたがって展開することはなかったのである (Ralston 1985：327)。その中で，島民主導の宗教運動をあえて考えるとすれば，1830 年代初頭に起こったハプ・カルト，および 1868 年に起こったカオナの反乱をあげることができる。

ハプ・カルトは 1831 年から 32 年にかけてハワイ島のプナ地区に始まった一種の千年王国運動である。これは，エホバとキリストに加えて，生前に信仰治療者として活躍したハプという少女を神と崇拝する，主に男性信者からなるシンクレティックな宗教運動であった。Dibble (1909 [1843]：247－248) によれば，信者達は掘り出したハプの骨をカパ(樹皮布)，花，鳥の羽で飾りつけて，「避難場 (the place of refuge)」と呼ぶ場所に据え，世界の終末を説いて人々にその場所に集まるように促したという。この宗教運動については歴史的資料があまりに少なく，その詳細について知ることは不可能であるが，Ralston (1985：325) は，この運動体は発展途上の千年王国運動であったのではないかと推測している。しかし，運動が拡大する前に，ディブル牧師の率いる現地宣教団によってその避難場所と寺院は破壊されてしまい，それを境に運動は沈滞化した。

(b) カオナの反乱

一方，会衆派教会が独立組織として歩み始めた 1860 年代に入って同じくハワイ島のコナ地区で起こったのがカオナの反乱であった。この反乱は，ホノルルの元判事でもあったジョセフ・カオナ (Joseph Kaona) が，1868 年にコナ地区の教会を占拠することで顕在化した宗教運動である。その前年にこの

地区にやってきたカオナは，彼の集めた大量のハワイ語聖書を一時的に建設中のラナキラ教会に保管することを許されたが，やがて教会建築に対する彼の率いるグループの貢献を主張して建物を占拠するようになり，自分の受けた啓示をもとにキリストの再臨を説いたのである。

この反乱については，当時の地元英字新聞，ハワイ語新聞，さらにはその地域を監督していた白人牧師や反乱の鎮圧に向かった元帥の回想録などの史料があり，また，ハワイの宗教史・政治史上の象徴的な一事件として繰り返し記述されてもいる（cf. Daws 1968：188－190，Kuykedall 1953：105－106)。よって，歴史的事件の再構築という観点からも非常に興味ある対象となりうるが，ここでは主に2つの英字新聞，Pacific Commercial Advertiser と Hawaiian Gazette[2]，に掲載された一連の記事をもとに事件の経過を描写したい。

[事件の前兆]

この反乱の首謀者とされるジョセフ・カオナは，当時のハワイ人エリート養成機関であったラハイナルナ神学校の卒業生であり，ホノルルで地区判事を務めた経験を持つ。彼は，1867年の春頃カリヒ地区で，死んだ隣人を蘇らせると主張してその埋葬を拒否し，死者の友人の申し出を断り4日間死体とともに過ごした末に逮捕されるという事件を起こした(HG 1868/02/12)[3]。そ

2） この両英字新聞はどちらも非宣教師系の新聞であるが，その政治的立場にはかなりの隔たりがあったといってよい。Pacific Commercial Advertiser の編集に携わったのは，宣教師の子孫で農園経営などの事業に成功して社会的発言力を持っていた白人エリートであった。同紙は，1856年に2言語の週刊紙として刊行され，1882年に日刊紙となり，1922年に Honolulu Advertiser となった。一方，Hawaiian Gazette は，ハワイ政府公認の新聞であり，1865年にそれまでの公認紙であった Polynesian に代わってカメハメハ5世によって発行されたが，1881年にカラーカウアが他紙をハワイ政府の公認紙にした際に廃刊となった。当然のことながら，両紙の描くカオナの反乱，特にネヴィル保安官の殺害の描写には大きな隔たりがある。なお，ハワイにおける新聞の歴史については，Chapin（1984）を参照せよ。

3） *Hawaiian Gazette*，1868年2月12日版。以下，同紙からの引用は同様に示す。

の後，彼はハワイ語聖書を大量に集めることに力を入れ始める。

ところで，1865 年頃からハワイ島北コナ地区のカイナリウで教会が建設されていたが (HG 1868/11/18)，この地域の監督をしていたパリス牧師の回想によると，1867 年にカオナが彼の前に姿を現し，自分はカイナリウの出身で再びこの地区に居を構えることになったと自己紹介した。彼は，大量に集めたハワイ語聖書を建築中の教会建物の中に一時的に保管させて欲しいと依頼し，教会役員の決議によりそれを許可された。しかし，数日後，彼とその一派がこの建設中のラナキラ教会を占拠するという事件が起こり，それがやがてカオナの反乱と呼ばれる暴動事件へと発展することになる (F 1926/6)[4]。

しかしながら，当時の新聞記事によると，教会建築に際する寄付金の大部分はカオナの側についた信徒によってなされたものであり，この具体的な衝突が起こる以前にカオナは会衆内でリーダーとしての地位をすでに固めていたようである (HG 1868/11/18)。また，その地位の確立には，彼の大量のハワイ語聖書が役に立ったと思われる。日曜礼拝の説教もパリス牧師とルナ (役員) の一人であったと思われるカオナによって分担されていたが，やがてカオナが礼拝形式に少しずつ「新奇」な要素を取り入れるようになる (HG 1868/11/18)。そして，1867 年 12 月，彼はこの世の終結とキリストの再臨について預言し，翌年 1 月 1 日にキリストが炎の剣をもって再臨，その時にカオナと共に教会内にとどまる者は救われ，他の者は滅ぶと説いたのである (HG 1868/02/12)。だが，予定された日には何事も起こらず，新たな啓示によりキリスト再臨の日は 1,2 年後に延期された。

このような一連のカオナの行動に反対して，パリス牧師と彼に賛同する会衆内の少数派が教会の独占的使用権を主張すると，カオナら多数派は，自分たちは教会の主たる寄進者であり，牧師の率いるグループと教会を共有しつつも独自のやり方で礼拝する権利があると主張した (HG 1868/11/18)。その後，牧師のグループが教会のドアに鍵をかけ，カオナ一派の建物からの締め出しを画策したが，間もなくそのドアは「神秘的な方法」でカオナによって

4） *The Friend*，1926 年 6 月号。以下，同紙からの引用は同様に示す。

開けられ，彼らは教会内に入り礼拝を行い，再び建物を占拠する（HG 1868/02/12，HG 1868/11/18）。

その結果，おそらく 1868 年 2 月上旬に，カオナ一派に対して家宅侵入の罪で令状が出され，当時の北コナ地区担当のハワイ人判事の意に反して，判事の不在中に彼らはナポオポオの監獄に約 9 日間監禁される（HG 1868/11/18）。カオナは 1 週間にわたって抗議の断食を行い（HG 1868/02/12），裁判の結果彼らは無罪放免となったが，教会建物は裁判所の管理するところとなり，カオナ，パリスの両グループとも建物の使用を禁止された（HG 1868/02/12，HG 1868/11/18）。

教会閉鎖後，カオナ達は教会のそばのウイリアム・ルナリロ王子の所有する土地で共同生活を始めるが，1868 年 3 月上旬にカオナは再び逮捕され，今度はホノルルに連行されて裁判を受けることになる（HG 1868/03/11）。彼は精神病院に 1 週間留置された後，担当医師，病院長の証言で発狂していないとされたものの，医師の許可が下りるまで精神病院で治療を受けるよう判決を下された（HG 1868/03/18）。

ところで，1868 年 4 月，ハワイ島では火山の噴火や地震が続いていた。パリスによれば，3 週間にわたって地震が続き，マウナ・ロア火山の溶岩によってカウ地方では多数の死傷者が出たという（F 1926/6）。彼の家族も屋外でのテント生活を余儀なくされ，彼は妻子をホノルルに避難させる。その後，ハワイ島に戻ってきた彼は，被害状況の確認や宣教活動を行うために精力的に担当地域を巡回し，新たに多くの信徒を獲得したようである（F 1926/6）。しかしながら，この機会をとらえて布教活動を展開したのは彼だけではなかった。カオナもまた「無知な人々」に世の終わりを告げ，神の怒りから逃れるために彼を真の預言者と認めてそのコミュニティに加わるよう，白人とハワイ人のいかんを問わず，使者を送って人々に説いて回ったという（F 1926/6）。

パリスによると，飢えと冷雨のためカオナ達はやがてキャンプ地を 1.5 マイルほど海側の土地に移動し，そこに多くの草葺きの家を建てて共同生活を続行し，また宗教的・政治的集会を開いたりした（F 1926/6）。この最終的なキャンプ地もルナリロの所有地であり，彼らはルナリロの父，カナイナから

土地貸借の約束を取り付けていたようである(HG 1868/10/28, HG 1868/11/18, F 1902/10)。

土地貸借についてルナリロと交渉するために，1868 年 10 月のおそらく第1週に，カオナによって使者がホノルルに派遣される。使者は一年分の貸借料を持参したものの，結局この交渉は不成功に終わった。交渉に先んじて，ルナリロは「貸借しないのが最善の策であると忠告され」(PCA 1868/10/24)[5]，反対派のグループが「土地の貸借権をカオナ一派に与えることを断り，自分たちにその権利を与えるようこの所有者を説き伏せていた」のである(HG 1868/11/18)。カオナ達が共同生活を送っていたその土地の権利を得たのは，この反対派のロイ氏であった。

[事件の勃発]

しかし，カオナ一派はキャンプ地に居座り，ロイのグループと対立することになる。自分が貸借された土地から出ていかないカオナ達に対し，ロイは，治安判事の立ち会いのもと問題解決に向けて彼の家で話し合う日時を決め，10 月 16 日，ネヴィル保安官らが地区判事の発行した告知書をキャンプ地に持っていった(PCA 1868/10/24)。しかし，カオナ達はその告知書を受け付けず，保安官は追い返される。結局，予定された翌日の会合にはカオナの側からは誰も出席せず，カオナ一派に対して逮捕状が発行された (HG 1868/10/28, HG 1868/11/18)。新聞に掲載されたロイの手紙によると，約束の時刻にロイ，治安判事，ネヴィルがロイ宅でカオナ一派の代表者が訪れるのを待ったが，誰も現れず，彼らの名前を 3 回呼んだが何の返答もなかったので，判事が板に打ちつけた逮捕状を持ってロイと警察官達が現場に向かったことになっている (PCA 1868/10/24)。

逮捕に向かったものの警官達はカオナ達の激しい抵抗にあい退却する(HG 1868/10/28, HG 1868/11/18)。その 2 日後，10 月 19 日月曜日の午前 9 時，ネヴィル，バレットの両保安官が数名(20 名から 30 名)のハワイ人警官

5) *Pacific Commercial Advertiser*, 1868 年 10 月 24 日版。以下，同紙からの引用は同様に示す。

を含む多く（約200名）の人々を従えて，カオナを逮捕すべくキャンプ地に向かった(PCA 1868/10/24)。ネヴィルとナポオポオの警官カマウオホの二人がカオナ達のいる場所に進むと，カオナは信者達に彼らを追い払うように命じ，カマウオホはそのうちの一人に殴打され，他の信者達も石を投げ出した。この混乱した状況でネヴィルは拳銃を発砲し，その2発目が一人の男に軽傷を負わせた。だが，その間も投石は続き，そのうち一つの石がネヴィルの頭部に命中し，落馬した彼は群集からなおも攻撃を受けた。この混乱の最中，カマウオホは何度も投げ縄をかけられたにも関わらず，負傷しながらもその場から逃げた(HG 1868/11/04)。また，ほぼ全員がネヴィルを見捨てて命からがら逃げたともされる(HG 1868/11/18)。この最初の衝突で，バレットの他，カマウオホを含む数名(3名)のハワイ人警官が負傷した(PCA 1868/10/24)。

カオナの信者達は重傷を負ったネヴィルを蔓で縛り，座った格好にしてその場に放置した。数時間後，彼がまだ生きていることを知ったカオナは，ネヴィルを殺さなければ神の怒りにふれると説き，信者の一人カヒコクに彼を殺すよう命じる。カヒコクは棍棒でネヴィルの脳をたたき潰し，カオナのもとに帰って彼の死を報告した(HG 1868/11/04)。その後，ローガン，ウイリアム，グリーンウェルら，多くの人々が遺体の返却を求めてキャンプ地を訪れたが拒絶されたため(HG 1868/10/28)，その日の午前中に再びカオナ達に攻撃が加えられた。この戦闘では，攻撃側のカマイという名のハワイ人が，投げ縄の名手として知られる一信者に捕まり，カオナの命令により彼の眼前でアリカによってその頭を斧で割られて死亡した(HG 1868/11/04)。また，カオナの側にも3名の死亡者が出た（PCA 1868/10/24)。

戦闘中に，攻撃側の「無責任な人物」[6]によってカオナ達の十をこえる家屋が焼き討ちにあい，彼らはその報復としてロイのグループに加わった者たちの家に火をつけると威嚇した(PCA 1868/10/24)。ロイの手紙には，カオナ達がラナキラ教会の敷地の所有者でもあった彼の妻を殺すと脅迫したので，彼

6） おそらく，クパケエの部隊を指していると思われる（PCA 1869/06/05)。

は家族を避難させたとある(PCA 1868/10/24)。反乱者達はロイとその妻，そしてパリスを殺すと公言していたが，その一方で，この地域に住む一，二の著名な外国人が彼らに同情して物資を供給していたようだ（PCA 1868/10/24)。

[事件の終結]

10 月 22 日未明，この反乱のニュースを受けた政府はすぐに軍隊の派遣を決定し，176 名の兵士を 2 隻の帆船で送り出し，この軍隊はマウイ島のラハイナで汽船キラウエアに乗り換えて現地に向かった(PCA 1868/10/24)。一方，その前日の 21 日に事件の知らせを聞いたハワイ島の他の地域の保安官も現地に直行し，ヒロからカウ経由でコウネイ保安官が，カワイハエからはチリングワース保安官が，23 日金曜日に相次いで到着した（PCA 1868/10/31, HG 1868/11/18)。その間，地元の志願者達で構成された警備隊は，キャンプ地からカオナの信徒が逃亡しないように警戒を続け，24 日土曜日の朝には南コナ，カウなどの地域から集まった 300 から 350 名の警官と志願者からなる部隊がカオナ達を逮捕すべく現地に向かった（PCA 1868/10/31)。

午後 1 時，両保安官が数名の警官とキャンプ地内に入ると，聖域と考えられるラナイ（敷地）では白衣に身を包んだ約 40 名の男と 20 名の女が，高く突き上げた右手に各々聖書を握り，自分達は神の単なる僕であり義なることを行おうとしているだけだと叫んでいた(PCA 1868/10/31)。また，敵に対する防御の手だてとして神の御言葉に頼っていると興奮気味に言い張る者もいた（HG 1868/11/18)。そして，カオナの側から男性 2 名（ルマアウェとカキナ）と女性 1 名（カルロ）が出てきて，2 時間余り保安官達と談判することになる(PCA 1868/10/24)。その結果，ルマアウェとカキナは投降したが，カルロは他の信者達と再び彼らの小屋の中に入った（PCA 1868/10/24, HG 1868/11/18)。その後，逮捕状が大声で読み上げられたが，何ら返答がなかったため，武装した警官達が中に侵入すると，白衣をまとった約 200 名の信者達は床に腰を下ろし，頭を互いの肩にのせて祈りを捧げるような格好をしていた(PCA 1868/10/24)。また，中央にいた女性は膝をついて中座したま

ま聖書を高く掲げ，機械のようにゆっくり回っていたという（HG 1868/11/18）。

彼らは再び投降するよう呼びかけられたが応答せず，互いに抱きついて抵抗したものの，やがて一人づつ逮捕された。また，カオナら指示に従わない者たちは縄で縛られた。そして，ホノルルから派遣された軍隊を載せた汽船がケアラケクア湾に入港した午後3時半頃には，キャンプ地に立っていた「エホバ」と書かれた旗が切り倒された（PCA 1868/10/24，HG 1868/11/18）。逮捕された全ての信者達は午後7時半頃までに中央コナのトッド邸の敷地に連行され，午後8時に現地に到着したホノルルからの軍隊に引き渡され，保安官と警官達からなる現地部隊は解散した（PCA 1868/10/24，HG 1868/11/18）。

翌日，10月25日日曜日，逮捕されたカオナら囚人達は，トッド邸よりカアワロアに停泊している汽船キラウエアに連行され，午後7時にカイルアに向かった（PCA 1868/10/31）。現地で警備にあたっていたグリック牧師[7]はその手紙の中で，彼らがカイルアに移送されたのは，おそらく大多数の信者が北コナの住人であり，多くの囚人達を収容し裁判にかけることのできる建物がその地区にしかなかったからだろうと指摘している（PCA 1868/10/31）。27日火曜日，カイルア・プロテスタント教会でコウネイ保安官によって予備裁判が開かれ，カヒコクがネヴィル殺害の罪に，カオナ，アリカ，カマカ，カラマの4名はカマイ殺害の罪に問われ，彼らは翌年5月にヒロの巡回裁判所において裁判を受けることになった（PCA 1868/10/31）。また，他の多くの信者達も従犯として関わった罪に問われて裁かれ，子供達は当分の間責任ある団体の管理下に置かれることになった（PCA 1868/10/31）。

1869年5月，ヒロで行われた裁判により，ネヴィルを殺害したカヒコクが第一級殺人の判決を受けて16年の強制労働の刑を言い渡され，カマイ殺害に

7） The Reverend Luther Halsey Gulick. 第3宣教師団でハワイにやってきたP. J. グリック牧師の息子であり，医師でもあった彼は，1864年から1870年にかけてHEAの評議会の秘書を務めている（HMCS 1969）。カオナの反乱についての報告書をPacific Commercial Advertiserに数回にわたって投稿した。

加わったとされるカオナ，アリカ，カマカ，カラマの 4 名は第二級殺人の判決を受けて 5 年から 10 年の強制労働の刑を言い渡された（PCA 1869/06/05）。カオナが比較的軽い第二級殺人罪の評決を受けたのは，彼が自分の弁護に際して「最も素晴らしい話を，時に穏やかに，時に激しく，また時に皮肉を込めて行い，幾つかの証言を完全に覆し，それが疑いなく陪審員に影響を与えた」からであろうと，当時の記事は指摘している（PCA 1869/06/05）。

事件が終結した後，数年間，カオナの信者達は各地で集会を開いたり，一，二度，選挙に独自の候補者を立てたりしたようである（Daws 1968：188－190）。しかし，その後，彼らが再び宗教的共同体または独自の教会を設立したという記録はない。パリスによれば，当時ほとんどハワイ人で構成されていたラナキラ教会とその地域のコミュニティから，300 から 400 人のハワイ人がこの事件を機に離れることとなり，教会はこの事件の後遺症からついに立ち直ることはなかったという（F 1926/6）。カオナについては，その後カラーカウア王の恩赦を受けて出獄してカイナリウに戻り，1883 年に死んだということが分かるのみである（F 1926/6）。

(c) カオナー派の教義と活動

パリスによれば，カオナは英語について幾らかの知識があり，モルモン教やイスラム教の教典を幾ばくかは読み，また，病気を治したり死者を蘇らせるといったハワイ古来のカフナの教えを身につけ，神と会話を交わすことのできる自分を地上における神の補佐官と考えていたという（F 1926/6）。カオナの教義は 1840 年代に合衆国で盛んになった再臨派のミラー派の教義に倣ったものであろうという指摘が後世になってなされているが（F 1902/10, HSB 1957/07/31）[8]，彼の教義がミラー派の影響を間接的にせよ実際に受けていたのかどうかは明らかではない。

カオナの説いた教義については，キリストの再臨と世の終末，そしてその後も生き残る選ばれた者たち，といった他の千年王国運動にも共通するオー

8） *Honolulu Star-Bulletin*，1957 年 7 月 31 日版。以下，同紙からの引用は同様に示す。

ソドックスな終末観に言及したもの以外，具体的に記述した史料は残っていない。また，残された史料においてもカオナの異端性は会衆派宣教師にとっての異端的な他の宗教，すなわち，モルモン教やイスラム教，カフナの風習や呪物崇拝等に容易に結びつけられて説明されるのみである。しかしながら，当時の新聞記事と関係者の報告や手記，更には，彼らの運動を紹介する目的で新聞に掲載されたカオナの信者の手紙などから，少なくとも彼らがどのような宗教的共同生活を送っていたのかをうかがい知ることはできる。特に，関係者の報告と信者の手紙は，事のあらましを両面から描写するという関係にあり，彼らの宗教活動をある程度「公正」に再構成するのに役立つだろう。

ところで，19 世紀の宣教師の報告書や手記の中にハワイ人信徒の迷信や呪物崇拝に対する批判を見つけることはそれほど珍しいことではない。カオナの反乱についても，グリックは手紙の中でその宗教運動をニュージーランドのパイ・マリエ運動[9] に非常に近いものであると指摘した後，「ハワイの国は完全に聖書で教化され，より高い文明に移行した。そして，このカオナ一派のセクトはより聖書を重視し，かつてないほどに敬虔な精神を見せている。しかし，その根っこは偶像崇拝だ。」と断言している (PCA 1868/10/31)。だが，彼のこの指摘をカルビン主義者の自文化中心的な観察の一例に過ぎないと否定することは難しい。なぜなら，当時の新聞記事とカオナの信者の手紙には確かに幾つかのアイコンや「もの」たちが繰り返し出てくるからである。

例えば，グリックによれば，カオナの信者達の所有物の中から 7 枚の異なるハンカチに包まれた日本製の小箱が見つかり，その中に赤い小鳥の頭骨と「その鳥が霊的世界における重用な力の一つである」というカオナが受けた啓示が書き記されたものが入っていたという (PCA 1868/10/31)。この赤い小鳥が具体的にどの鳥を指すのかは不明であるが，古来ハワイにおいては赤は神聖色であり，骨は霊的力を秘めたものとされ，様々な鳥が象徴的な意味を持っていたことを考えると，その骨を「彼らの信仰とハワイ古来の偶像崇拝を結

9） 1862 年，メソジスト教会のマオリ信徒テ・ウア・ハウメネが啓示を受けて始めた宗教運動。白人に対する戦闘的な抵抗運動となったため，軍隊によって徹底的に弾圧された (石森 1982)。

びつけるもの」で「迷信的尊敬の対象」であるとするグリックの指摘は，エスノセントリックな表現を借りているとはいえ，全く的外れなものではなかったといえる。

小鳥の骨が入っていた箱は7枚のハンカチにくるまれていたが，7という数字もカオナたちにとって意味のある象徴的な数字であった。ホノルルから土地の貸借権を得て帰ってくると期待された使者がキャンプ地に戻ってきた時，彼らは7本の白旗を掲げ，7日間の祝宴を初める準備をしていた(HG 1868/10/21)。旗の色についての記述は異なるが，自らを「オハナ(家族)」と名乗る信者らの手紙も，彼らは「これからやってくる怒りの7つの瓶を表す様々な色の7本の旗」を持っており，カオナが「古代イスラエル人の間で彼ら（ダビデ達）が行ったように，7日間にわたって祝宴を続けねばならない」と命じたと説明している（PCA 1868/10/24)。また，同じ手紙は，「カオナが今度で7度目にあたる牢獄に行かねばならず，その後に終わりがやってくるが，信者達は無事であると預言した」と主張している(PCA 1868/10/24)。

カオナの信者達の白に身を固めた服装も当時かなり目を引くものであったようだ。この点についてはいくつかの記事・回想録において記述されているが，彼らは白衣（信者の手紙によれば白いローブ）を着て，男は白いリネンで覆われた椰子の帽子をかぶり，女は白いターバンをつけ（PCA 1868/10/31)，また，聖書を白い鞄に入れて下げるか(F 1902/10，F 1938/9)，腰に巻き付けていたようである（HG 1869/05/12)[10]。更に，ホノルルからの使者を迎える際，白衣を着た信者達の行列の先頭でカオナが白馬にまたがっていたとある(HG 1868/10/21)。ただし，会衆派教会の信徒の正装も白であり，カオナ達が外部の人間の目を引いたとすれば，衣服の形状に加えて彼らが常にそれを身につけていた点にあったのかもしれない。

しかしながら，彼らにとって最も重要なアイコン（白人牧師の言い方に倣えば「呪物」）は，ハワイ語聖書であった。逮捕に踏み込んだ兵士の前で，信

10) パリスによれば，信者達は白いバッジを帽子に付けていた(F 1926/6)。また，彼の娘，エラ・ハドソン・パリスによれば，彼らは白いバンドを頭に巻き付けていたという(F 1938/9)。

者達の高く掲げられた手に握られた聖書は，また，パリスがその回想録で記しているように，普段は刀のように腰にぶら下げられていたのである(F 1926/6)。予備裁判に出廷した100名以上の信者達を見てグリックは，「カオナー派の狂信的信仰の固執性は，ハワイ人の目には非常に素晴らしいものに映る。依然として可能な限り多くの狂信者達がその聖書に執着している。彼らの多くが裁判室に連れてこられたが，皆非常に信心深く聖書に執着していた」と，おそらく肌身離さず聖書を身につけていたであろう彼らの姿を見て，彼らの聖書への執着性を指摘する（PCA 1868/10/31)。

この聖書への執着性は，カオナ達の場合も例にもれることなく，そこに書かれている言葉に文字どおりに従う原典主義的態度や行為へと帰結する。信者の手紙では，彼らが「詩編第150節」を賛美しながらいかに楽しい時を過ごしているかが述べられ，神を讃えるために奏でる楽器として，灯油缶，ブリキのポット，やかん，パイプ，皿，樽など，様々な物を集めて，古代のダビデ王たちに倣って祝宴の準備を進めている様子が説明されている(PCA 1868/10/24)。また，手紙によれば，カオナの信者達は，敵を見かけたり，その家の前を通ったりする時には「詩編」を高らかに歌い上げ，また，親が子供達に同じようにするよう教え，そうすることに彼らも喜びを感じていたのであった（PCA 1868/10/24)[11]。

この手紙が書かれた時，カオナ達のキャンプ地での共同生活はいよいよクライマックスに向かっていた。彼らはホノルルから戻ってくる使者を迎え入れて祝宴を始める準備を進めており，預言によれば，火山が噴火して溶岩が流れ出し，カオナ達の共同生活に加わらない者全てが滅び，キャンプ地レフウラ・ヌイ[12]に留まる者のみが救われることになっていたのである。しかしながら，手紙の内容は，使者が貸借権を得ることができずに帰ってきたこと

11) エラ・ハドソン・パリスによれば，信者達は詩編を歌いながら地域一帯を行進したという（F 1938/9)。

12) Lehuula Nui. 字句通りに訳せば「大きな赤い灰」となる。後世の「フレンド」では「Honua Ino（悪い土地)」と呼ばれており（F 1902/10)，おそらく痩せた土地であったと思われる。

に言及した後，にわかに錯綜し始める。まず，新たな預言によって彼らの現在のキャンプ地にも溶岩が流れ込むことになったと述べるが，その直後にそれまでの実例を上げて預言が外れることもあると認め，ひるがえって，次に彼らが居を構える土地こそが唯一破滅を逃れる場所だと主張する(PCA 1868/10/24)。そして，ラナキラ教会を再び占拠することを暗示しながらも，政府に対して経済的な援助を求めたり，ラナイかカホオラヴェといいた近隣の島を新たな共同生活の地として要求するのであった(PCA 1868/10/24)。

彼らの共同生活は，おそらく極めて初期の段階より，キャンプ地に留まりながらカオナの預言の成就をただひたすらに待つというものであった。タロ，豚，鶏などの食糧を命じられて持ち込む以外に彼らはその場所を離れることはなく(HG 1868/02/12)，信者の手紙によると，夜は空を見上げて終末を告げる雲が現れないかと警戒する一方，昼間は断食を行い，そうすることで信者達は仕事をする必要がなくなり，異言を操り預言を行うようになると教えられていたという(PCA 1868/10/24)。手紙は，財産を献上する新たな信者を募っていると述べ，カオナが物を持たずに暮らしていく方法を教えてくれると説くが，その具体的な方法については，サツマイモ，トウモロコシ，豆類といった促成作物を栽培する他は「主に詩編を歌うことで生きていくつもりである」と述べるのみである(PCA 1868/10/24)。後世の記事によれば，カオナは新しい信者から家やクレアナ（権利）を手に入れる見返りに，彼らが生きている限り面倒をみることを約束した「契約書」[13]を渡していたようである。

このように，現金収入につながる労働を拒否して預言の成就を待つという彼らの共同生活は，当然のことながら外部の者，特に白人牧師達にとって「怠惰」な反社会的な行為に映った(HG 1868/02/12，HG 1868/03/11，HG 1868/03/18)。「彼（カオナ）の教義や行為の危険性は，彼個人が他の人たちに危害を加えるというよりも，彼が多くの人たちに財産と生業を捨てさせ，怠惰や

13) そこには「A like pu me ka mea hiki.（私のできる限り。）」と書かれていたという(F 1902/10)。

宗教的幻想を信じることで自らを貧しくさせることにある」と当時の新聞記事は述べている(HG 1868/03/11)。また，彼らの行為は当時のハワイ人のステレオタイプに容易に結びつき，カオナの教えはキリスト教によって文明化したハワイ人をもとの怠惰で呪物崇拝を行う未開人に戻すものとして捉えられたに違いない。

カオナの反乱は，地元紙での扱いの大きさを考えてみても，キリスト教社会にとって一大事件であった。しかし，当時の会衆派の機関紙「フレンド」とHEAの「年報」には，この反乱についての記事は全く見あたらない。ただ，1869年7月号の「フレンド」に掲載された年報付録において，前年度[14]を振り返って「ハワイ島コナ地区でカオナという名の偽の預言者によって起こされた狂信的運動の勃発を除けば，全ての我々の地域で平安が保たれた」と記されているだけである（F 1869/7)。

結局，カオナの起こした宗教反乱は，一つの大きな運動体となることはなかった。そこに宗教運動の萌芽は認められるものの，宗教組織として確立する以前に圧倒的な白人勢力によってその芽を摘み取られたともいえる。それは，30年代初頭のハプ・カルトと同様，特定の土地に集まり，また，そうするよう人々に呼びかけ，世界の終末を待つという千年王国運動的性格をおびていた。しかし，ハプ・カルトとは異なり，その運動が教会内部で始まったこと，直接白人牧師とリーダーシップをめぐって衝突したこと，キリスト教社会内だけではそれに対処しきれなかったことには留意すべきであろう。外来宗教であるキリスト教をハワイ人が自分たちのものにしようとする行為が，教会内部においてより鮮明かつ能動的な形で現れた事件ともいえるのである。しかし，それはまた，白人が圧倒的に優位である社会において，それに直接対立して展開される島民主導の千年王国運動が持つ限界性をも示していた。

ところで，カオナの反乱において，教義や儀礼上の対立(「正統」対「異端」)と教会組織内の対立（白人とハワイ人の間の主導権争い）が，土地（そして

14) 当時のHEAの年度は5月で終了し，6月上旬に総会が開かれていた。

それに伴う主権）や経済的援助の要求といった政治的・経済的闘争へと転換していったことに注意する必要がある（cf. Kodama 1974）。運動の後半，特にキャンプ生活を強いられて後，彼らの反乱が宗教的共同体を基盤とした政治経済的な闘争へと変化していく点に，19 世紀後半のハワイ人のおかれた経済的状況を垣間みることができるのである。

19 世紀後半の会衆派教会において，白人とハワイ人の間における教義解釈・信仰生活上の対立はそれほど特異な現象ではない。この時期，教会内部で白人宣教師達は，ハワイ人信徒の背教（backsliding）に加えて，彼らが依然として保持している民間信仰に神経をとがらせていたのである。しかしながら，キリスト教をハワイ人独自のやり方で彼ら自身のものとする行為（これは宣教師にとって「正統」なキリスト教から逸脱していく行為であった）は，当のハワイ人が無自覚であればあるほど，白人宣教師の目につかない領域で存続し進行することになる。

カオナのように直接的に白人指導者に対峙するという形ではなく，少なくとも独立できる力を蓄えるまで教会内部において密かに進んでいくキリスト教のハワイ化が，本論文の後半の対象となる。しかしその前に，19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのハワイ社会の変容とそれがキリスト教（特に会衆派）社会に与えた影響について考察しなければならない。

Ⅳ．19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての社会変動と会衆派教会

(a) ハワイ人の人口変動

1778 年西洋人が初めてハワイ諸島を訪れた時，島民の人口は 30 万人から 40 万人と推定された[15]。しかし，西洋文明との接触の結果，外部から持ち込まれた麻疹，天然痘，コレラ，百日咳，インフルエンザ，性病などの伝染病

15) ヨーロッパ人との接触時のハワイ人の人口については，その数字は 30 万から 80 万まで諸説があるが，ここでは Schmitt (1977) によっている。以下，人口統計資料は，特に指定していない場合，Schmitt（1977）を参照している。

により，免疫を持たないハワイ人の人口は急激に減少する。19 世紀の初頭には彼らの人口はおそらく 20 万人を下回り，アメリカから宣教師達がやってきた 1820 年頃には 15 万人を割っていたとされる。宣教師によるセンサスでは，1831 年から 32 年にその数はおよそ 13 万人，1835 年から 36 年には 10.8 万人となった。

その後もハワイ人の人口は減少の一途をたどるが，19 世紀後半のハワイ社会は，少数の白人と大多数のハワイ人という人口構成から，彼らに加えてプランテーションの労働力として中国，ポルトガル，日本から大量に連れてこられた移民を含めた複合民族社会へと変容していく。これはまたハワイ人の他民族との混血を進める結果となった。そして 1890 年には混血を含めてもハワイ人は全人口の過半数を占めることができなくなり，20 世紀に入ると日系人にその最大民族集団の地位も奪われる。

こうしたハワイ人の人口減少，混血化に加えて見逃してはならないのが，ハワイ人を含めたハワイ社会内における人口移動である。ハワイ諸島は，主にハワイ，マウイ，ラナイ，モロカイ，オアフ，カウアイ，ニイハウといった島からなるが，19 世紀後半はそれまで一番人口の多かったハワイ島に代わり，オアフ島に人口が集中しだした時期であった（もっとも総人口自体がこの時期減少しているのでオアフ島の人口が順調に増加していたわけではない）。人口の移動は，各々の島での田園部から都市への人口流入に加えて，他の島からホノルルという一大港湾都市を持つオアフ島への人口流出の形をとって現れた。おそらくハワイ人も各島での都市部への移動，さらにはオアフ島のホノルル市への移動という全体の流れに加わっていたと考えられる。

こうした人口変動が 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての会衆派教会，特にハワイ人教会に大きな影響を与えたのは言うまでもない。19 世紀末には，ハワイ人の人口変動の教会活動に与える影響についての指摘が HEA の「年報」にしばしば見受けられるようになる。1896 年の「年報」では，「かつては多くの人々が住み，日曜礼拝には大挙して人々が押し寄せていた地域も，今ではハワイ人の人口減少と彼らの首都への移動の結果，40 年，50 年，60 年前に建てられた教会建物の残骸が残るだけである」と述べられ，1899 年の「年

報」では，カウアイ島担当の牧師が，「当時（50 年前）はハワイ人の人口が多く，教会の規模は大きく，教会活動への参加も盛んであった。現在は，人口が縮小，拡散し，教会活動への参加率や礼拝出席率は低下している。その一方で，外国系企業に携わる人たちが進出してきている」と指摘し，社会の変化に則して教会のシステムも改革しなければならないと提案している。

一方，ハワイ人の都市への流入については，1916 年の「年報」で，過去 15 年間のホノルル市の爆発的人口増加は，アジア系移民と白人以上に，ハワイ人がその要因になっており，オアフ島にハワイ人の全人口の半分以上が住むようになった結果，「他の島の（ハワイ人）教会，特にその田園部にある教会が非常に弱体化する一方で，オアフにある教会がかつてないほど重い責任を負うようになっている」といった指摘がなされている。

しかしながら，ハワイ人の人口減少のみでは 19 世紀後半に始まる会衆派教会の信徒数の減少と教会活動の停滞を説明することはできない。例えば，1866 年のセンサスで 62,959 人（うち混血を含むハワイ人は 58,785 人）であったハワイの総人口は，30 年後の 1896 年には 109,020 人（うちハワイ人は 39,504 人）となり，ハワイ人についてみればその減少率は 32.8%であった。一方，1863 年に本国組織の ABCFM から HEA が独立した時に 19,725 人であった会衆派教会の信徒数は，30 年後の 1893 年には 5,438 人（うちハワイ人教会は 4,226 人，非ハワイ人教会は 1,212 人）[16]に減少し，ハワイ人教会についてみれば，78.6%の減少（全体でも 72.4%の減少）となった。このようにハワイ人教会の信徒数の減少率がハワイ人総人口の減少率をはるかに上回っていたのである。

16) HEA において，ハワイ人教会と非ハワイ人教会との区別が統計上明確にされたのは 1890 年頃からである。しかし，ハワイ人教会の信徒全員がハワイ人であったわけではなく，また，非ハワイ人教会にもハワイ人信徒が所属することがあったと思われる。両者の比率は，ハワイ人とハワイ人以外の民族集団との比率に直接結びつくわけではないが，HEA 内におけるハワイ人信徒の占める割合のある程度の目安にはなると考えられる。

(b) キリスト教各宗派の流入とその活動の増大

19世紀の後半，新たにハワイにやってきたのは移民たちだけではない。メソジスト，ルター派，セブンスデー・アドベンティストなど他の宗派も次々にハワイに宣教師を送っていた（cf. Mullholland 1970)。しかし，これらの宗派はハワイ人以外の民族集団をその主な伝道対象としており，少なくともこの時期にハワイ人の改宗に影響を与えることはなかった。19世紀末において，「プロテスタントのハワイ人＝HEAのメンバー」という相関関係は依然として強く，プロテスタントのハワイ人の98%が会衆派教会の信徒だったのである（Gallagher 1983：59)。

このような状況下，先にも述べたように，1850年にモルモン教，1862年に英国聖公会がハワイ人を対象に宣教活動を開始する。1853年に行われたセンサスでは，対象となった71,019人のハワイ人のうち，プロテスタント(会衆派）が56,840人[17] (80.0%)，カトリックが11,401人(16.1%)，モルモン教が2,778人（3.9%）であったのに対し，1896年のセンサスでは，39,504人のハワイ人のうち，プロテスタント（ほぼ100%が会衆派と予想される）が16,084人(40.7%)，カトリックが11,060人(28.0%)，モルモン教が4,764人(12.1%)，他宗教または無宗教[18]が7,596人(19.2%)となった。1853年のセンサスでは，全てのハワイ人はキリスト教のいずれかの宗派に属していることになっており，統計の妥当性にやや問題があるかもしれない。だが，この二つの統計結果を比べると，19世紀後半に，ハワイ人の中で会衆派の勢力が後退してカトリックとモルモン教の比率が上がっていること，他宗教・無宗教のハワイ人が無視できない割合を占めるようになったことが明白である。

Lind（1952：12）も指摘するように，ハワイ人のプロテスタント（会衆派

17) センサスの数字（56,840人）とHEAの発表した1853年の信徒数（22,236人）の間にはかなりの開きがある。これは，自称プロテスタントと教会が認めた正式メンバーとの数字の開きとみて良い。

18) センサス中，無回答のもの全てがこのカテゴリーに含まれる。この無回答層を他宗教・無宗教のハワイ人と考えて議論をすすめることにする（cf. Lind 1952)。

信徒）の相対的な減少は，背教（backsliding）とカトリックとモルモン教の積極的な宣教活動との二つの要因によって説明される。19 世紀後半は，会衆派の本国組織（ABCFM）がハワイから撤退する一方で，カフナに代表されるハワイの伝統宗教が復興し始め，また，カトリックとモルモン教の宣教活動が軌道にのった時期であったのである。特にモルモン教は改宗の対象をハワイ人に絞り，1896 年のセンサスでは 4,886 人の信徒のうち 4,764 人（97.5%）がハワイ人であった。また，同じセンサスで，特に混血ハワイ人（part-Hawaiian）の間で他宗教・無宗教の占める割合が多い（8,485 人中 2,214 人，26.1%）ことを考えると，他民族との混血の結果，キリスト教から離れたハワイ人も少なからずいたと予想される。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて会衆派教会の勢力が後退しはじめると，「フレンド」や「年報」では他宗派の影響を憂う記事が目につくようになる。例えば，ある記事では，モルモン教が 42 カ所の礼拝施設を持ち，16 名の白人長老の指導のもと宣教活動を展開していることが紹介されている（F 1895/9）。また，政治や出版・言論の分野では依然としてプロテスタント（会衆派）が優勢であるが，過去 30 年間にカトリックとモルモン教が急激にハワイ人信徒を獲得しており，カトリックでは 25 名の白人司祭が活動しているのに対し，会衆派ではハワイ語に通じた在職の白人牧師は 5 名しかいないといった指摘もなされている（F 1903/8）。会衆派教会の勢力が後退したのは，これら他宗派の勢力的な白人宣教師に見合うだけの力量が会衆派ハワイ人牧師に備わっていなかったためであるというのが，両記事における HEA の白人指導者達の一致した見解であった。

(c) 「古き良き体制」の消滅

ハワイにおける宣教活動の初期には，王国のレベルではカアフマヌなどその活動を積極的に押し進める王族が存在し，各地方でも教会活動を保護し援助する首長達が存在した。改宗した首長の厳命により地域一体に住むほとんどの人々が教会の日曜礼拝に集い，群衆が首長の命令のもと整然と参列するということはそれほど珍しいことではなかったのである（cf. Emerson

1895)。しかし，このように宣教師にとって都合の良い社会制度は，裏を返せば，王族や首長達の後押しがなくなるとその活動に行き詰まりを見せる危険をはらんでいた。

1854年に即位したカメハメハ4世の反米的態度は会衆派教会に直接向けられたものではなかったが，彼が英国聖公会の支援に回ったことは，それまで王族の協力を得ていたHEAにとって打撃であった（Gallagher 1983：33)。また，1863年に即位したカメハメハ5世は，フラやカフナなどハワイ伝統文化の復興に力を入れたとも言われる（Kuykedall 1953：125)。特に，即位2年前の1861年頃，彼の尽力により300名以上のカフナに公式の免許が発行されたことは，当時のキリスト教社会にとって一大スキャンダルであった(F 1888/7)。1874年に即位したカラーカウアは，更にハワイ伝統文化の復興を押し進め，1886年には「近代の科学，芸術，文学，博愛の進歩と結合して，ハワイの古代科学を復興する」ことを目的にHale Naua Societyという秘密結社を設立した（Bicknell c 1890；Kuykedall 1967：345)。

このように19世紀後半の会衆派教会は，以前のように王族からの援助を受けることができなくなっていた。また，ハワイ伝統文化の復興に見られるように，それまでのキリスト教化の流れに逆行する動きが王政レベルで進んだこともそれに追い打ちをかけることになった。そのため，白人牧師達は次第に王室と対立する立場を取るようになり，彼らの王族への否定的なコメントが機関誌の紙面を飾ることになる。19世紀も四半期を残す頃となると，宣教活動初期に宣教師達が享受していた彼らにとっての古き良き体制は消滅していたのである。

(d) 伝統的宗教およびカフナの復興

宣教活動の初期において，白人宣教師達にとってのハワイ人は，改宗し文明化したキリスト教徒と伝統文化の中にとどまる異教徒（backslidingした者も含む）のどちらかであった。しかし，19世紀も後半に入ると，改宗したはずのハワイ人信徒の間でも依然として伝統的な宗教や信仰が何らかの形で保持されていることに白人牧師達は気づくようになる。このような事態を招

いたのは，初期の厳格な入信規制を緩和したことが一因であった。いずれにせよ，「キリスト教徒対異教徒」という単純な図式は崩れ，彼らはハワイ人信徒の持つ異教的・異文化的な部分と対峙しなければならなくなったのである。

例えば，マウイ島ハナ地区の教会のある執事は，20 ドル金貨にハカと名付けて崇拝の対象とし，過去 40 年以上にわたってそれを保持していた。しかし，ハワイ人巡回伝道師とその執事の息子の説得により，その金貨は教会の共有財産として没収されたという(F 1892/10)。また，あるハワイ人牧師は，前任のハワイ人牧師の家屋の窓枠やドアの上に，アヴァ('awa)[19] の根，カーライパーホア(kālaipāhoa)[20] の木片など見つけて，前任者が呪物崇拝していたことを知ったと告白する(F 1892/10)。このようなハワイ人信徒達の保持する伝統的な呪物信仰を捨てさせるべく，ジェームズ・ビクネル牧師は 1889 年 9 月に「聖書講読及び呪物崇拝鎮圧連合 (the Association for Bible Reading and for the Suppression of Idolatry)」を結成して，伝統的な習慣を放棄させる運動を展開した(F 1892/10)。彼は，ハワイ人信徒が異教徒と呼ばれることを極端に嫌い，どれほど深く呪物崇拝的行為に関わっていようと，その行為が実際に明るみに出ない限り自分の異教的行為を認めないと考えた (Bicknell c 1890)。そのため，この問題を解決するには，内部事情に通じたハワイ人の協力は不可欠とされたのである (F 1890/ 9)。

このハワイの伝統的宗教文化を代表する存在がカフナであり，彼らのハワイ人信徒への影響が 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて会衆派教会が直面した最大の問題の一つであった。ハワイ語でカフナ (kahuna) とは，広義には特定職業の熟練者・専門家を意味する。その種類は多様であるが，宗教的職能者(僧侶，預言者，呪術師)，治療師，職人などに大きく分けられ，いず

19) カヴァ。その根を砕き絞り出した汁を宗教儀礼の際に，また，嗜好品として飲用した。当時，アヴァの飲用はアルコールの飲用と共に白人牧師達によって信仰の妨げになる好ましくない慣習として非難され，カフナはアヴァ常用者として批判された。

20) 3 種類の木の総称。それぞれ 2 名の男神と 1 名の女神が木の形をとったものと考えられ，霊的な力が吹き込まれると極めて毒性の強い木になるとされ，その木片は黒魔術に使用された (cf. Kamakau 1964)。

れも程度の差こそあれ霊的世界との交流を伴った宗教的性格が強い役職である（cf. Kamakau 1964；Malo 1951）。また，彼らの役割は細分化されており，その社会的機能は互いに重複することも多い。

ところで19世紀後半より会衆派の牧師達が問題視していたのは，病気やけがの治療に携わるカフナであった。また，1861年に発行されたカフナの免許も彼らに対してのものであった。もっとも呪術師と治療師の境界は明確なものではなく，例えば黒魔術を行うカフナ（kahuna ‘anā‘anā）も病気を治療することができ，治療に携わるカフナ（kahuna lapa‘au）も薬草を使用するだけではなく霊的な力の助けを借りることが多い。しかしながら，当時の白人牧師達にとって，邪術師と呪医，治療師はいずれも土着の霊と関わる異教的存在であり，カフナとはそれら全てをひとまとめにした職能者であった。

カフナの復興した背景としては，まずそれが制度的に進行したことを考えなければならない。先にも述べたように，1861年頃にはおよそ300名のカフナに対して公式に免許が発行され，病気に応じた治療額などが設定された（F 1892/7）。政府に正式に認可されたことにより彼らの活動は活発となり，半ば忘れ去られようとしていたアウマクア（‘aumakua）[21]や土着の神々についての民間伝承を教える教室を開く者も現れたという（F 1888/7，F 1892/7）。更に，1886年には，ハワイ保健局（Hawaiian Board of Health）が設置される（F 1888/7，F 1892/7）。Pukui et al.（1972 b：160－1）は，白人のハワイ伝統医療への否定的な態度に対する反応として，また，西洋や中国の医師を含む全ての治療師を認可する全体の流れの一つとして，カフナを制度化する動きが出てきたと考え，このような制度化は「役に立つカフナ」と「害を加えるカフナ」の社会的機能の混乱と重複をなくすことを意図していたと指摘する。ハワイ保健局設立に関する法令は，「‘Ana‘ana，Ho‘opi‘opi‘o，

21）家族や個人の祖先神または守護神。多くは祖先が神格化されて神となり，彼らはサメ，フクロウ，ウナギなどの動物，特定の植物，さらには特定の石や岩，雲や虹などに姿を変えていると考えられた。アウマクアに対してはいくつかのタブーが課せられることが多く，また彼らは夢，幻覚，幻聴で自分の子孫に様々な知らせを送るとされた（cf. Kamakau 1964）。

Ho'ounauna, Ho'omanamana[22] の行為に及んだとみなされる者はその免許を没収される」(cited by Pukui et al. 1972 b：161) としており，当時の政府は医療専門家としてのカフナの確立を目指していたことがうかがえる。しかしながら，会衆派の白人牧師達の目には，このような政策はキリスト教による文明化に逆行するものとしか映らなかった。

次にカフナの復興の背景として考えなければならないのは，19 世紀後半のハワイ人の人口減少と医療状況，および彼らの保持する伝統的病気観である。先に述べたように，ハワイ人の人口は西洋文明との接触以降 19 世紀末まで減少を続けたが，島民の衛生管理，医療事業は，教育と並んで宣教師にとって活動初期からの重要課題であった。ハワイ人は宣教師達に医療援助を求め，ABCFM の基金の大部分が医療品の購入に当てられ，宣教師達も多くの時間を治療にさいた (SF 1867/8)[23]。本国に撤退した ABCFM に代わり，ハワイ政府が白人牧師達に医療品を支給する役目を引き受けたが，やがてその資金も底をつき，その結果，適切な医療体制が維持できなくなったためにカフナの行為が活発化してきたというのが，当時の白人牧師達の見解であった (SF 1867/8)。この解釈がどこまで事実に即したものであるかは即断できない[24]。だが，病気や死に際して，ハワイ人信徒がカフナと接触をはかるという問題は，白人牧師達にとっては明白な事実であった。この問題は，1880 年代から 1900 年代にかけての「フレンド」や「年報」で頻繁に取り上げられるトピックであり，まず最初に対処すべき課題であったのである (cf. F 1889/2, 5, 10, F 1890/9, F 1892/8, F 1901/2)。

22) これらは全て黒魔術の一種である。'Ana'ana ('anā'anā) は祈禱や呪文を用いる黒魔術であり，Ho'opi'opi'o は呪術師が自分の身体の一部を触ることで，他人の身体の同じ部分に害を与える模倣呪術の一種である。また，Ho'ounauna は，霊を送って危害を加える呪術であり，Ho'omanamana は，ここでは霊的力 (マナ) をある物質に吹き込むこと，更に，そのような迷信的呪物崇拝を意味する (cf. Kamakau 1964)。

23) *Supplement to the Friend*, 1867 年 8 月号。以下，同紙からの引用は同様に示す。

24) 後に示すように，外来の病気は白人医師に，土着の病気はカフナに治療を依頼するという，西洋とハワイの医療の使い分けが，まず考えられる。また，経済的理由から西洋医療を受けられない場合や，白人の病院に対する一種の抵抗感なども，カフナ復興の背景として考えねばならない。

必要に応じてカフナと接触するという問題は，ハワイ人一般信徒に限ったことではなかった。親族の中に病人が出て身内の者たちから説得されると，ハワイ人牧師でさえカフナを雇わざるを得ない状況に追い込まれることがあり，場合によっては牧師自身が病気や臨終の際にカフナに来てもらうことさえあった(F 1889/5，F 1901/2)。あるハワイ人牧師はその手紙の中で，彼らもカフナの呪術によって死ぬことを恐れており，表立ってカフナに反抗することができないと述べている(F 1889/5)。当時の白人牧師達は，アウマクアやウニヒピリ('unihipili)[25]，その他の土着の神々の霊的力へのハワイ人の信仰は，彼らの精神構造に深く刻み込まれ代々受け継がれてきたものであるとみなし，精神的に弱くなる病気や臨終の際に彼らがこの邪悪な力に助けを求めるようになるのは無理のないことだと考えていたようである(F 1889/10)。

ところで，白人牧師達は，カフナの儀礼やアウマクアの信仰などの基盤となるハワイ人の伝統的な病気観や霊魂観について見落としていたわけではない。なかでも，「呪物崇拝鎮圧連合」を結成し，その調査と摘発に力を入れたビクネルは，ハワイ人の病気観とカフナの活動について幾つかの文章を残している。彼によると，ハワイ人は，1］身体の不調(sickness)は，霊の憑依もしくは病気(disease)によって引き起こされ，2］霊は自分の意志または悪意あるカフナの指示で人に憑き，3］憑依による身体の不調は常に治すことができるが，4］本当の病気の場合は薬によって治すことができるものの常に完治するとは限らない，と信じていた(F 1890/9)。また，ハワイ人はキリスト教の神は魂の世話しかせず，肉体的な病に関する祈りは聞き入れてくれないと考え，エホバにのみ信頼をおくのは危険であり，病気の時にはアウマクアにも助けを求めなければならないと信じていると，彼は指摘する(F 1890/9)[26]。LMS の宣教師を父に持つこのタヒチ生まれの牧師にとって，

25) 死者の霊魂。死者の髪の毛や骨に留まり，人はその霊魂を操ることができると信じられた(cf. Kamakau 1964)。

26) 「Aohe pono ke hahai pololei loa ia Iehova. E aho ke hookapakahi iki ae.(エホバに頼りすぎるのは良くない。どちらかに偏らない方が良い。)」といったハワイ人信徒の言葉が，彼らの信仰観を表している(F 1890/9)。

「食前にエホバに祈りを捧げ，薬を服用するときにアウマクアに祈る」ハワイ人の行為は矛盾に満ちたものであった（F 1890/9）。

肉体の救済と魂の救済をそれぞれ土着の神と外来の神に分担させるというハワイ人の行動は，他の白人牧師の指摘するところでもあった（F 1903/10）。また，外国人医師は外国の病気を治すことができるが，土着の病気は土着の医師（カフナ）のみが治療することができるというハワイ人の病気観に言及する白人牧師もいた（SF 1867/8）。このように根強い伝統的な霊魂観・病気観に基づき，ハワイ人信徒達は伝統的宗教と外来宗教や西洋医学をそれぞれ役割分担させることで共存させていたと考えられる。しかしながら，例えばビクネルがこのような事態に接して省みたのは，これまでの教会活動において彼らが聖書の教えを強調するあまり，医療教育，ハワイ人医師や看護婦の育成に力を入れていなかったという事実であり，医学的な知識を普及させ，その知識を身につけた信頼できる者に病人を看護させることでカフナの介入を阻止できると彼は考えていた（F 1892/8）。

19 世紀の後半，このようにカフナの活動が活発化し，会衆派の牧師達はその対処に苦慮していたが，彼らの間にはある共通したカフナのイメージがあった。それは古代のカフナにある種の正統性を認め 19 世紀末のカフナにそれを否定するといったものであった。彼らはカフナの持つ伝統的な医療知識を完全に否定していたわけではなかったのである。例えば，ビクネルは「古代，カフナになろうとする者は誰でも訓練を経なければならなかった。しかし，呪物崇拝が禁止され，その行為が犯罪として罰せられるようになると，（カフナになるための）規則は緩和された。現在，活動しているカフナの大多数は，自らそう名乗っているだけで，（技術的にも）やぶ医者に過ぎない。」（F 1890/9）と述べている。古代のカフナがハワイの薬草の使用法に熟知しており，西洋医学が行き渡らなかった時代には彼らの技術はそれなりに有益であったことを認める一方で，19 世紀末のカフナはそのような伝統的知識を持たない単なる呪物崇拝者にすぎないという主張は，白人とハワイ人のいかんを問わず会衆派牧師達の間でなされていたのである（F 1892/7，A 1895）[27]。

27） *The Annual Report*（「年報」），1895 年版。以下，同誌からの引用は同様に示す。

(e) 非ハワイ人教会の成立とハワイ語から英語への移行

19 世紀後半の HEA に所属する会衆派教会は，ホノルルの Bethel Church や Fort Street Church，ヒロの First Foreign Church など主要港湾都市に居住する白人を対象とした教会を除けば，そのほとんどは宣教師達がハワイ人のために設立したハワイ人教会であった。しかし，19 世紀末に向けてさとうきび産業が急速に発展すると，まずプランテーションに住む白人達のために英語礼拝が行われるようになり，英語会衆が形成されて，これらの会衆はやがて白人教会として確立される(cf. F 1879/4，A 1902，F 1915/11)。更に，中国，ポルトガル，日本からの移民のための教会が設立され，HEA は当時の複合民族社会を反映した複数のエスニック教会からなる協会組織へと変容していった。

19 世紀末から英語による教会活動が HEA 内で重要性を増していったのは，白人教会の設立に加えて，ハワイ人若年層が英語で教育を受けるようになった結果，ハワイ人教会内で英語の使用が徐々に望まれるようになってきたことにもよる。英語新聞を読み，日常会話もほとんど英語で行うようになった彼らが，ハワイ人牧師の行うハワイ語礼拝に興味を失って教会から離れてしまう可能性が指摘され(A 1889，A 1901)，要望に応じて礼拝式を部分的に英語で行ったり，毎月特定の日曜日に英語礼拝を行う教会が次第に増えていったのである(A 1897，A 1898，A 1902)。こうして，19 世紀末には教会活動での使用言語はハワイ語から英語へと徐々に移行することになり，ハワイ人教会はハワイ語しか解さない古い世代の信徒と英語による教会活動を望む若い世代の信徒とに分断されることになる。そして，この世代間の隔たりや新しいニーズに応えられるハワイ人牧師の不足などが，ハワイ人教会の抱える問題として浮上した。

20 世紀に入ると，白人牧師達は，使用言語の切り替えは終了し，新しい言語の採用に伴う困難な時期は過ぎ去り，英語礼拝はいくつかの教区において試験的な段階を終えたものとみなすようになった(F 1903/10，F 1909/ 5)。しかしながら，ハワイ語から英語への切り替えに伴う問題は，特に協会運営のレベルで 1930 年代まで存続することになる（cf.　F 1916/11，F 1917/4,

F 1921/7，SF 1926/9，SF 1927/6，F 1932/9・10，F 1938/5)。

この時期，地方都市では白人教会が成立する一方で，同じ地域のハワイ人教会はハワイ人信徒の減少により弱体化していく。混血ハワイ人が徐々に増えていくものの,「この新しい集団はその思考と言語においてもはや完全なハワイ人ではなく，衰退するハワイ人教会は彼らにアピールしない」と考えられた(A 1900)。そして，地方におけるハワイ人教会の中には，英語会衆との合併に存続の望みを託さざるを得ない教会も出てきたのである（A 1901)。

(f) ハワイ王朝の崩壊

1893 年 1 月 17 日，リリウオカラニ女王が王位から退位させられ，約 100 年間続いたハワイ王朝は終わりを告げて，臨時政府が樹立される。この王朝転覆に積極的に関わったハワイ併合支持派の中には，いわゆる「宣教師一派(Missionary Party)」とも呼ばれる初代宣教師の子孫が多くいた。この事実は当然のことながら会衆派ハワイ人信徒の間に大きな混乱と動揺を引き起こすことになる。HEA はハワイ人信徒の間で著しくその信頼を失い，ハワイ人教会の礼拝出席率も低下し，白人牧師達はハワイ語新聞を通じて女王退位の支持を表明するものの，ハワイ人一般信徒の説得に苦心したようである(Walsh 1993：35)。

白人牧師達にとって，カラーカウア，リリウオカラニと続いた 19 世紀末のハワイ王室は，道徳的に堕落し，異教的な迷信を広め，会衆派教会に悪影響を及ぼす諸悪の根元であった(F 1893/2, 5, 12，F 1897/9)。この王室のもたらす悪影響を嘆き，それに対して懸命に反抗してきたハワイ人牧師達は，最も賢明で教養もある志の高いハワイ人であり，彼らは悪しき王朝の崩壊を心から喜び，さらには合衆国との併合も熱烈に望んでいると，当時の HEA の白人指導者達は「フレンド」で主張する (F 1893/2, 5, 12)。一方，ハワイ人一般信徒の大多数はずっと教養がなく，この政変が自らの国においてハワイ人の権利を押さえつけるものであると教え込まれ，新政府に対して敵意を抱いていると彼らは考えた(F 1893/12)。白人牧師達は，白人勢力の拡大に対して長年不満を抱えていた一般ハワイ人信徒が，政治的論争を教会内に持ち込み，そ

れが調和のとれた教会活動を妨げる原因となっているとみなしたのである(F 1893/2, A 1895)。

この時期，王朝転覆とハワイ併合を支持するハワイ人牧師達は，各教会で多数派である王室支持派の一般信徒の非難の矢面に立つこととなり，その何名かは辞任に追い込まれた(F 1893/12, A 1895)。「政治的問題が教会内で徒党的な行動を生み出し，退位させられた女王の復位を願って祈るか否かが，多くの教会の多くの集会において一つの試練となり，良心的な牧師が強いられてその問いに（否定的な）答えを出したり，先の政府と女王の下した決定の幾つかを否認したりすると，彼はたちまち教会内の敵対する集団から猛反対を受けることになった」のである（A 1983)。

1899 年の「年報」では，王朝転覆がもたらした政治的論争に一応の終止符が打たれ，人々の目は未来に向けられ出したことを示唆する記事が載る。しかし，依然として政治的紛争や不安は教会内に持ち込まれ，ハワイ統治をハワイ人の手に戻そうとする反白人色の強い Home Rule Party に参加するため教会活動から離れたハワイ人牧師もいたようである(A 1901)。このハワイ王朝の崩壊によって会衆派教会およびハワイ人信徒が被ったダメージは，少なくとも潜在的に今日まで残存することになる[28)]。

このように，19 世紀後半から会衆派教会は，ハワイ人の人口変動，異民族集団の流入，キリスト教他宗派の活動，王族による援助の消滅，カフナに代表される伝統的宗教文化の復興，ハワイ語から英語への移行，ハワイ王朝の

28) 1993 年 1 月 17 日に行われたハワイ王朝転覆 100 周年の記念行事では，キリスト合同教会（the United Church of Christ）本部の大管長が，王朝転覆に関する会衆派教会の責任を認めて公式に謝罪を行った。しかしながら，UCC 傘下のハワイ部会(the Hawaii Conference of the United Church of Christ）から王朝転覆 100 周年に関する公式声明が出されたのはそれから数カ月たってからのことであり，ハワイ部会内のハワイ人牧師の間でも公式謝罪を行うことに関して様々な意見があった。なお，ＵＣＣ本部のハワイ王朝転覆に関する公式見解については，New Conversations （Spring 1993）を参照されたい。また，ハワイ王朝転覆 100 周年に関する日本語の文献としては中嶋（1993）などがある。

崩壊，といった様々な社会変容の影響を次から次へと受けた。こうして 20 世紀に入ると，会衆派教会はもはやハワイ社会において以前のように絶対的な優位を占めることができなくなる。更に，その協会内では，ハワイ人信徒は多数派の地位を追われることになり，数の上でも主役の立場から降りることになったのである。このような状況において，会衆派ハワイ人信徒による独立系教会形成の動きが出てきたのであった。

V．独立系ハワイ人教会の誕生

(a) ホオマナ・ナアウアオの誕生

1903 年 4 月 16 日，ホノルルのケ・アラウラ・オ・カ・マーラマラマ（Ke Alauala O Ka Malamalama）教会[29] においてジョン・ケキピ・マイア（John Kekipi Maia）は，独立系ハワイ人教会「ホオマナ・ナアウアオ（Hoomana Naauao）」の創立 50 周年を祝う記念講演を行った。同年 5 月 20 日に出版されたこの記念講演の冊子のコピーは，現在も同教会の信徒の間で流通しており，その英語訳も出されている（Morrison 1984）[30]。

現在，信徒の間で「ジュビリー・ブック」[31] と呼ばれるこの冊子は，ケキピが彼と彼に影響を与えたポロアイレフアの宗教活動を振り返ったものであ

29）現在のハワイ語表記にそってつづると「Ke Alaula O Ka Mālamalama（啓蒙の光の道）」となる。光の道（alaula）とは，朝日に照りかえって赤く光る海面のことである。なお，本論文におけるハワイ語表記は，専門用語を用いる場合を除き，原則的には資料やインフォーマントの表記を優先している。

30）Morrison（1984）の英語版は，ハワイ大学マノア校の宗教学 690（大学院ゼミ）に提出されたペーパーである。誤訳が散見されるものの，本論文では明らかな誤訳を除けば基本的に彼女の訳を参照して考察を進めることにする。

31）*Buke Hai Euanelio O Ka Hoomana Naauao No Ka Piha Ana O Na Makahiki Iubile He Kanalima Aperila 16, 1853-Aperila 16, 1903.* 同教会の信徒でハワイ語を読むことのできる者はほとんどおらず，「ジュビリー・ブック」は彼らの間で半ば聖典化されていた。以前に年輩の信徒による英語訳も試みられていたが完訳されるにいたらず，Morrison（1984）によって英語に訳されていたことも，筆者が彼らにその存在を知らせるまで知られていなかったようである。

り，その内容を追うことで教会設立の背景を知ることができる。しかし，その「歴史」はあくまでもケキピの回想という形を取って再構成された物語であり，その中で語られる出来事の象徴的な意味にも十分注意を払う必要がある。

また，当時の彼の教会のおかれていた立場を考えると，講演には政治的な意図がある程度込められていたと思われる。当時，ホオマナ・ナアウアオから分派した教会に対して，自らの教会の正統性を50年という歴史によって主張する必要があったと考えられるのである。事実，ケキピが啓示を受けて伝道活動を開始したのは1881年4月16日のことであり，教団が結成されたのは1893年7月31日であった。彼が，教会の創立日とした1853年4月16日とは，彼に回心のきっかけを与えたポロアイレフアが啓示を受けて伝道活動を始めた日であったのだ。

「ジュビリー・ブック」は，象徴的な意味や政治的な意図などを含んだテキストである。ここでは，まず初めに，このテキストに基づいて，ハワイ人によるこの独立教会がどのように形成されたかを追うことにしたい。

[ポロアイレフアの伝道活動]

ケキピによると，彼の教会の歴史は，ジョン・ハヴェル・ポロアイレフア(John Hawelu Poloailehua) がホノルルで伝道を開始した1853年4月16日に始まる。彼は，「信仰大復興」にハワイ島がわいていた1838年頃，同島ハマクア地区のククイハエレに生まれた。1852年，14歳の時，彼はホノルルに移り，ロングという名の船長のもとで子守の仕事をしながら生活することになる。翌年2月，高熱に倒れた彼は，雇い主である船長に聖書を持ってきて欲しいと嘆願した。カワイアハオ教会のルナ（役員）から借りた聖書を彼が胸の上に置き，目を閉じて祈りを捧げると，「申命記32章39節」という文字が瞼に浮かんだという。そして，聖書を開けてその節を読み神に誓いを立てるや否や，彼の健康は回復したのだった。

1853年4月16日とは，まだ15歳の少年であったポロアイレフアが神と誓約を結び病から救われて伝道活動を開始した日であった。彼は当時らい病の

蔓延していたアプア地区で伝道活動を続け，彼とその家族もらい病にかかったが，彼の教えを受け入れなかった家族全員は死に，彼のみが生き残ったという。その後，1854年頃まで彼はホノルルで伝道活動を続けたが，その教えに懐疑的な者もいたようである。

1855年，ポロアイレフアは帆船に乗ってモロカイ島に向かう。しかし，船上で彼は再び病に倒れてハワイ島のハラヴァで下ろされ，そこで死ぬものと思われた。この時も，彼は精霊の導きにより聖書の「コリント書第2・12章8節」を見るよう教えられ，また，生まれ故郷のハマクアで彼が飼っていた牛の夢を見る。ここでも祈りを捧げると，彼は病から回復したのであった。その後，ハマクアに戻った彼は，同地区およびコハラ地区などハワイ島北部で，彼の経験した奇跡の回復について説いて回り，伝道活動に励んだ。以後，彼は，オアフ島のワイアルア教会やハウウラ教会[32]で数年間にわたり説教師として活動を続けたという。彼の教えの中心は，「救済されるためには悔い改めなければならない」という極めてオーソドックスなものであったが，この教えを広めようとしたがために彼は6度にわたって監獄に入れられた。当時の彼の主張は，呪術とみなされていたのである。

[ケキピの入信]

ところで，ケキピがポロアイレフアに初めて会ったのは，それから四半世紀たった1881年の2月11日（この日は彼の50歳の誕生日であった），ハワイ島北コハラ地区のマカパラにある彼の家においてである。当時彼はポロアイレフアの伝道活動について既に聞いており，その教えが呪術的なもの(hana ho‘omanamana）とされていたことも知っていたようである。彼はポロアイレフアに自分の家にしばらく滞在するように勧め，その日の夕食後，彼の使用人も招いて家族礼拝を開く[33]。ケキピの息子であるエリ（John Eli

32） いずれもHEAに属する会衆派の教会と考えられる。両教会の残された資料の中に彼の名前を見つけることはできなかったが，おそらく教会内部で彼は独自に活動を続けていたと思われる。

33） 現在の教会の信徒によると，ケキピ家は当時かなり裕福な一族であったようだ。しか

Kekipi Maia）は，結核を患っていたこともあり，すぐにポロアイレフアの教えに興味を示し，それから一カ月後に洗礼を受けた。

ケキピは当初よりポロアイレフアの教えに疑念を抱いていたが，子供の一人が歯痛にかかったために，ポロアイフレアがエリの病気を治すのに用いた祈りの文句を唱えて祈願したところ，その子供の歯痛がひいた。このことで彼はポロアイレフアの教えが正しいのではないかと感じ始めたが，依然としてそれが完全に正しいと認めることができないでいたようだ。

この年の2月から4月にかけて，家族礼拝がポロアイレフアの指導のもとマカパラの集会建物において継続的に行なわれていたが，4月13日に突然ポロアイレフアはケキピが翌日の礼拝式を司ると宣言する。翌14日，ケキピは説教の準備をせずにその日の礼拝に出席し，その場で聖書を開いて目にした「創世記3章9節」に基づいて説教を行った。次の日も説教を行うよう命じられた彼はその準備をしようとするが果たせず，またもやその場で聖書を開けて「出エジプト記32章24節」を読み，それに基づいて説教を行う。引き続き16日の礼拝式も任された彼は，神が必要な聖句を与えてくれるものと確信して説教の準備をせずに礼拝に出席し，その場で聖書から「詩編51章6節」を読み上げて説教を行った。この説教が終わると，ポロアイレフアは3日間にわたってケキピが行った説教は精霊からもたらされたものであり，主が彼を宣教者として選ばれたのは明白であると告げたのだった。

ポロアイレフアが話をしている間に，身体に不調を感じたケキピは，屋外に出て集会建物の傍らで嘔吐し，神の声を聞くことになる。それは，彼が密かにポロアイレフアの祈禱を用いて子供の歯痛を治したという過ちを問いただすものであった。しかし，自分の過ちを認めて神に許しを乞うと，身体の痛みはたちどころに消えた。そして，彼は再び建物の中に入り，説教壇の上から礼拝参加者たちに向かって自分の回心と神への帰依を宣言したのであっ

し，ポロアイレフアの教義に疑念を抱いていたはずのケキピが，なぜ自分の家に彼を滞在させ，彼の指導のもとに家族礼拝を行ったのかは不明である。ただし，この回想録を彼の回心の物語ととらえれば，回心以前の彼の立場をこのように否定的に描くことは，物語をより劇的なものにしているという点で，意味のないことではない。

た。こうして，ポロアイレフアが伝道を開始して28年後の1881年4月16日，彼に導かれて回心したケキピも伝道活動を始めることになる。

ところで，当時，ハワイ島コハラ地区には1841年に設立された会衆派のカラーヒキオラ教会があり，ケキピも同教会の信徒であった。この教会を設立し当時も信徒を指導していたエリアス・ボンド牧師は，1861年に同地区にコハラ砂糖農園を開いてハワイ人の都市部への流出に歯止めをかけ，またハワイ人だけではなく増加する中国人への宣教活動にも力を入れていた。彼の「覚え書き」[34]には，「1881年11月10日，ケキピが役職を降りる」というメモがあり，同年4月に伝道活動を開始したケキピが半年後，教会もしくは農園の職務から退いたことが分かる。また，「覚え書き」には「1882年7月13日，ケキピ・マー（ケキピ一派）とハマクアに向かう」というメモもあり，当時教会内でケキピたちは一集団として認知されていたと思われる。

1881年から86年にかけて，ケキピの教えはコハラ地区全域に広がった。その教えは，病気で身体が弱った時にこそ神が正しきものであることが分かるといった，救済へ向けての悔悛と信仰治療を中心にすえたものであった。また，1883年から1885年にかけてホノルルのハワイ人牧師ポレペに当てた3通の手紙[35]から，当時，ケキピがハワイ語聖書，ハワイ語聖歌集，その他の書物を牧師を介してホノルルから購入していたことが分かり，彼が活発に伝道活動を展開していたことがうかがわれる。こうして彼は徐々に同地区で信者を獲得していくが，同時に彼の教えは偽物，迷信的信仰であるという批判も数多く出てくるようになった。

ある年の5月，カラーヒキオラ教会で日曜礼拝の際，ボンド牧師[36]によっ

---

34) *Bond, Elias., Memoranda (Vol.III 1881-), The Journal Collection, 1819-.* Hawaii Mission Children's Society Library.

35) *Kekipi, J. E., 1883-1885, H. E. A. Archives.* Mission Houses Museum Library Collections of the Hawaii Mission Children's Society. 1883年10月5日，1884年12月12日，1885年1月23日付の手紙である。

36) 彼の「覚え書き」や書簡において，ケキピの迷信的信仰について言及した箇所を見つけることはできなかった。しかし，ボンドの書簡には，彼の当時のハワイ王室に対する否定的な態度が垣間みられ，その問題については，ケキピを含めた他の親王室派の信徒

てケキピはその活動について公にその非を問われる。ケキピと教会内で彼が率いる多くの信徒たちにとって，それは寝耳に水の話であった。礼拝式の後，会衆内で特別委員会が開かれ，教会の教えに対立するような行動を取ったことがあるかどうか，自分の行為が呪術的性格をもったものであるかどうかを，彼はボンドに尋ねられる。ケキピの返答は勿論否定的なものであり，彼の迷信的行為を指摘した者の証言も「耳にしたことはあるが実際に見たことはない」といったものであった。この委員会では，呪術的行為を行った者はケキピではなく，カイオオニという名の信徒であると断定され，その結果彼は教会から除名された。この事件の後も，ケキピの教えは広まっていくが，彼自身も認めるように，その活動はあくまでHEAの教会内で展開されたものであった。

[独立教会の設立に向けて]

1887年10月29日，午前3時，夢の中でケキピは自分の教会を立てよという神の声を聞く。その夢とは次のようなものであった。ケキピとエリが部屋の中にいると，外から一組の男女が這って入ってくる。理由を尋ねると彼らはケキピの教会に入りたくてやってきたと言う。だが，彼らが未婚であることを知ると，ケキピは彼らを教会に受け入れることを拒んだ。当時，息子のエリはモルモン教に改宗しており，彼はこの男女に結婚すれば自分の教会の信徒になれると言って，彼らを家の外に連れ出し，そこで洗礼を施した。

ケキピがエリの洗礼を施す文句を部屋の中で聞いていると，突然彼に話しかける声が聞こえてきた。辺りを何度か見渡すと，部屋の中にノアに似た風貌の男が立っていた。彼は「私の教会を立てるのなら，今後そのような振る舞いをしてはならない」と説き，更に「ローマの信徒への手紙12章1節」[37]と

達と対立していたと予想される。

37)「こういうわけで，兄弟たち，神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ，あなたがたのなすべき礼拝です。」（ローマの信徒への手紙第12章1節）この聖句の中にある「なすべき礼拝（ホオマナ・ナアウアオ）」が，後にケキピの率いる独立系教会の教団名となった。

「ヘブライ人への手紙6章16,17,18節」を見るよう教え，望む者は誰でも受け入れる（火と精霊によって洗礼を施された）真の教会を立てるように命じた。この啓示によりケキピは自分の教会を立てることを決意するが，実際に教会を設立するにはまだ数年を要することになる。

1889年2月，ケキピは再び啓示を受ける。それは王室に彼の教えを伝えよというものであった。彼は早速ホノルルに向かい，当時病弱だったカピオラニ女王を通じてカラーカウア王と接触することに成功する。そうして彼らに王室に基盤を置いたハワイ人のための教会を設立する必要を力説したのだった。4月26日，女王はケキピの教えを選択して教会を設立する決意をし，彼の教会（ホオマナ・ナアウアオ）を国と王室の宗教とする草案がジョン・ブッシュ[38]によって作成された。だが，いよいよ女王が草案に押印しようとする時になって，教会設立はケキピの仕事であり，王室の仕事はそれを援助することだという意見が国王から出され，ケキピの計画は頓挫した。

同年7月，教会の設立に先立って，国王，ケキピ，ホアピリ・ベイカー[39]らが聖地巡礼に赴くという国王からの発案があった。この国王の海外巡航について宮廷私室が協議することになり，ケキピはいったんコハラに戻り最終決定がなされるまで待機することになる。しかし，結局この計画は却下されたため，彼は8月再びホノルルに移り住み，独自に伝道活動を展開することになった。彼の教えはまたしても非難の対象となったが，その信仰治療により信者を徐々に獲得していったようである。

ケキピはホノルルでカウマカピリ教会に所属していたが，1890年に同教会を他の信徒を引き連れて脱会し，カリア地区に集会建物を建て，独立教会と

38) John E. Bush. カラーカウア王政の時代，ハワイ人からなるグループと宣教師の子孫でハワイ生まれの白人からなるグループが，ハワイの政治経済における主導権をめぐって競争・緊張関係にあった（cf. Kuykendall 1967）。混血ハワイ人のブッシュは閣僚経験もある前者のグループの中心人物の一人で，「Ka Leo O Ka Lahui（国の声）」というハワイ民族主義を主張したハワイ語新聞を発行していた。彼のメディア・キャンペーンは「フレンド」で激しく批判された（Mookini 1974）。

39) Robert Hoapili Baker. ホオマナ・ナアウアオ創立時の牧師の一人。彼もブッシュ同様，当時のハワイの政界においてハワイ人グループの中心人物として活動した。

して活動を開始する。1890年の「年報」は，前年度を振り返って，特にマウイとオアフの幾つかの教会において内部対立，人種偏見，異教的行為といった問題が噴出したことを取り上げ，また，諸問題の今日的な特徴として信徒達が自分の受けたとする啓示を開陳する点を指摘している。この記事は，教会内部で抗争があったものの，その後「もみ殻は選り分けられた」として不満分子が教会を去ったことを示唆しているが，おそらくこの「もみ殻」はケキピと彼の率いる信徒達を指しているものと思われる。

ハワイ王朝が崩壊して半年後の1893年7月31日，ブッシュの提供した礼拝堂を教会として，独立系ハワイ人教会ホオマナ・ナアウアオが設立された。続く8月4日に開かれた2度目の集会で，「ホオマナ・ナアウアオ」が教団名として正式に採択され，ケキピが初代の教会筆頭牧師に選ばれ，安息日，洗礼，聖餐式など，基本的教義や儀礼についての話し合いがなされた。一方，HEAの白人牧師達は，このような一連のケキピの活動を王朝崩壊の混乱に乗じた異端的行為とみなして非難し，また，ハワイ人牧師のS. カイリが教会の規約を破ってケキピの活動の手助けをしていることを批判した（F 1893/8)。こうしてホオマナ・ナアウアオは教会組織として徐々に形を整えていくが，組織内に全く問題がなかったわけではない。2度目の集会では，幾人かの「教養ある」者たちが，「火と精霊による洗礼」というケキピの案に反対して，教会を離れている。

その後，1897年7月31日に新しい教会建物が建立され，ケ・アラウラ・オ・カ・マーラマラマ（Ke Alauala O Ka Malamalama）と名づけられた。この教会を母教会として，1893年7月31日から1903年4月16日にかけて，10以上の教会がハワイ，マウイ，ラナイ，モロカイ，オアフ，カウアイなどの島々に設立される。こうして，今世紀の初頭に，ホオマナ・ナアウアオは，ハワイ人の間で徐々に勢力を拡大していき，1911年2月16日に宗教団体として公認された[40]。

---

40) *Official Letter on Feb.16, 1911. Hoomana Naauao O Hawaii.* Department of Commerce and Consumer Affairs.

(b) ホオマナ・ナアウアオの初期の教義と活動

「ジュビリー・ブック」から読みとることのできるホオマナ・ナアウアオの教義の最大の特徴は，「悔悛」の強調とそれを前提とした信仰治療である。ポロアイレフアは病床での悔悛と奇跡的な回復を機に伝道活動を始め，また，彼と出会ったケキピは，自分の犯した過ちのために身体に異常をきたし，その苦しみの中で悔い改め，神の教えを広めると決意することで回復したのであった。

ところで，当時の「フレンド」は，「果たされぬ約束」というタイトルの連載記事で，カフナ信仰やモルモン教と並んでホオマナ・ナアウアオも異端的宗教として非難している(F 1917/12)。白人牧師の否定的な解釈を通してではあるが，当時，ホオマナ・ナアウアオがどのように伝道活動を展開していたかをうかがい知ることができるので，以下その記事の内容を紹介したい。

社会的地位もあり教養もあるN氏は，医者にも見放され失明の危機に瀕していた。彼は会衆派教会の信徒であったが，失明するという絶望感から，視力の回復を約束するホオマナ・ナアウアオの牧師の話を聞くようになった。そのうちに彼はこの独立教会の信徒となるよう説得され，教会のメンバーとなった。しかし，病状は好転しないため，彼らは彼の妻も教会の信徒となるよう説得する。彼女も教会のメンバーとなり，彼自身も言われるままに断食と祈禱を続けたが，症状に変化は見られなかった。そのため，彼がホオマナ・ナアウアオの幾つかの教義について問いただそうとしたところ，望ましくないメンバーとして彼とその妻は教会から除名されたという。

また，M婦人は，この教会の信徒になったものの，病状は良くなるどころかますます悪くなるばかりであった。しかし，彼らはこの状態を見て，容態が悪化したのは彼女がまだ本当に罪を告白していないからだと主張した。彼らは色々と手を尽くしたが，結局彼女は胃ガンのため病院で死亡したという。

「フレンド」の批判記事における以上の事例からも，奇跡的な治癒には絶対の悔悛・懺悔が要求されるというのが，ホオマナ・ナアウアオの教えの根幹であったことが分かる。そのため，この独立系ハワイ人教会はクリスチャン・サイエンスではないが，非常に良く似た伝道活動，すなわち信仰治療を前面

に押し出した活動を行っていると紹介された(F 1917/12)。また,後に彼らは,俗称としてではあるが,「ハワイアン・クリスチャン・サイエンス」と呼ばれるようになる (Burrow 1970 [1947])。

ところで,当時のホオマナ・ナアウアオの儀礼的な特徴として,まず第一に「夢見」を上げることができる。たとえば,ポロアイレフアは病床で見た夢と神の啓示によって伝道活動を開始し,彼に導かれたケキピも啓示を受けて回心した。また,ケキピの独立教会設立に向けての幾つかの重要な決断も夢見や啓示を通してなされたものである。

第二の特徴としては,聖書を開けて目に止まった聖句の中に神意をはかるという,後にヴェヘ・イ・カ・パイパラ (wehe i ka Paipala) と呼ばれる行為を上げることができる。たとえば,ケキピの回心の物語,すなわち,彼がその場で開いた聖書から目に入った聖句に基づいて3日間連続で説教を行ったことをその典型的な例として考えることができよう。また,ポロアイレフアが,夢の中である特定の聖句を指定され,夢から覚めてその句を読み神意を理解するといった行為も,自分の意志で聖句を選んでいないという点で同様の意味を持つと思われる。

以上が,「ジュビリー・ブック」に見られるホオマナ・ナアウアオの教義と儀礼の特徴である。また,「ジュビリー・ブック」には出てこないが,ホオマナ・ナアウアオのもう一つの主要な儀礼として「フレンド」の批判記事で触れられている「断食」を上げておきたい。N氏の事例に見られるように,この断食は祈禱と組み合わせて行われることが多かったと思われる。

残念なことに,「ジュビリー・ブック」を除くと,ホオマナ・ナアウアオの初期の教義や儀礼に言及した史料はほとんど見あたらない。だが,教会創立期からの中心メンバーであり1924年頃から39年まで教会主任牧師を務めたアンドリュー・イアウケア・ブライト (Andrew Iaukea Bright) とのインタビューをもとに,Burrow (1970 [1947]) が幾つかの特徴的な教えを紹介しているので,ここで言及しておきたい。

ブライトによると,ホオマナ・ナアウアオの信徒は,古代ヘブライ人とエジプト人がハワイ人の祖先であると信じる。また,彼らの教義は十戒の教え

に基づいており，その教えの根本は宣教師達がハワイにやってくる以前にカメハメハ大王によって「マーマラホア（Māmalahoa）：裂けた櫂の法」[41] の中で示されていたという。信仰治療を強調する彼らの教義において，病気の原因はその患者が犯した罪にあり，治癒するためには，まず自分がどのような罪を犯したかを見いだし悔悛しなければならない。罪には，考え，言葉，行いにおける 3 種類の罪があり，患者は，父なる神に対して罪を犯したことを認め，キリストに対して許しを乞い，精霊に対して治癒を祈願しなければならない。以上の祈願によっても効果が得られない場合は，更に断食が行われることになるという。

ブライトは，また，1901 年にケキピが従姉妹の病気を祈禱と断食によって治したことが新聞記事となり，以後 3 年ほどの間教会が社会的に批判を浴びたことや，ケキピの息子のエリが 1919 年 11 月から 12 月にかけて 40 日間にわたる断食を行ったことなどを紹介している。しかし，彼自身は医者に見放された患者しか信仰治療の対象として取り扱わないと告白しており，少なくともブライトが教会を指導するようになってからは，ホオマナ・ナアウアオでは西洋医学は拒絶されていなかったようである。

(c) 「ジュビリー・ブック」に見るハワイ文化

ホオマナ・ナアウアオの歴史を説明した「ジュビリー・ブック」は，ケキピにとって「真の」キリスト教への回心の物語であり，伝道の物語である。しかしながら，実のところ(皮肉なことに)，それはハワイの伝統的宗教文化の特性を濃厚に表したテキストでもある。換言すれば，このテキストを通して，キリスト教の受容においてハワイ文化がどのように作用したかを考察することができるのである。

---

41) 「Māmala-hoe」ともつづる。この法によって，老若男女が公道でも安心して眠ることができるとされた。人の生死を決定する重要な法であり，死に瀕した人間もカメハメハ大王がこの法をかけると生き返ったという（Kamakau 1964：15)。

例えば，夢見や啓示といった現象は，ハワイの伝統的な宗教文化の特徴の一つであった（Kamakau 1964；Pukui et al.1972 b)。深い眠りについた時に本人の霊魂が肉体を離れてさまよい，時にはアウマクアからメッセージを受けるとされる夢（moe ‘uhane）や，寝入り端や起きる直前など比較的浅い眠りの中でみる夢（hihi‘o）など，ハワイ文化では夢は幾つかの種類に分類され，また，夢の中に込められたアウマクアからのメッセージ（hō‘ike na ka pō）を読みとることはハワイ人にとって非常に重要なことであった（Pukui et al.1972 b：170－171)。このような文化的コンテキストを考慮すれば，ポロアイレフアやケキピが経験した夢見や啓示は，彼らにとってキリスト教的な体験であったが，また同時にハワイ文化に特徴的な体験でもあったことが分かる。よって，Pukui et al.（1972 b：183）も指摘するように，キリスト教的文化がハワイ文化における夢の重要性を強化したとも考えられよう。

ところで，ハワイ語聖書は，ハワイ人にとっては霊的な力を備えたものであり，無作為に開くこと（wehe i ka Paipala）により神と交信することができる道具であったと考えられる。ハワイ語聖書は，夢見と同様に彼らに神からのメッセージを伝え，また，夢で得た啓示に解釈を与えてくれる道具であったのである。ハワイ人にとって自然界に現れる様々なサインや予兆（hō‘ailona）の解読は，極めて重要な行為であったが，この伝統文化に聖書のこのような利用法は極めて適合的であったといえよう。

ホオマナ・ナアウアオの活動の中心であった信仰治療も，文化接触以前には宗教的職能者であるカフナが担っていた分野であった。また，ケキピが伝道活動を展開した19世紀後半は，カフナの制度化が進み，治療者としてカフナの果たす役割がその重要性を増していた時代であった。ホオマナ・ナアウアオの信仰治療は，キリスト教の教義に基づいて体系づけられたものではあったが，彼らの活動が西洋医療に組み込まれないハワイ人を対象としていたことを考えると，その社会的な機能は当時の制度化されたカフナとそれほど異なるものではなかったといえる。

ブライトの説明によれば，患者は，信仰治療の際，父なる神に対して罪を認め，キリストに対して許しを乞い，精霊に対して治癒を祈願することにな

る。しかし，この信仰治療の過程も，治癒を祈願するという段階においては，土着の神（アウマクア）をキリスト教の神（精霊）で代替したにすぎないと考えることができる。ただし，土着の信仰治療の体系に，キリスト教的概念の「罪」と「悔悛」が追加され，治癒の説明的枠組がキリスト教化されていた[42]。

(d) 独立系教会の変容

19 世紀後半に始まったこのハワイ人による独自の教会活動は，現在に至るまで続いている。現在の独立系ハワイ人教会の教義，儀礼，活動を詳細に記述し考察するのは本論文の目的ではないが，1994 年から 1995 年の調査結果に基づいて，その概要について紹介しておきたい。

[その後の独立系ハワイ人教会]

1893 年にホオマナ・ナアウアオが教会組織として結成された直後，創立者ケキピの洗礼に関する考え方に同意できないメンバーが脱会したことは，先に同教会誕生の背景を紹介する際に述べた。実は，この教会内部での対立およびそれに引き続く分裂は，以後のハワイ人独立系教会の歴史をたどる際，避けては通れない問題となる。

1904 年，ホオマナ・ナアウアオのメンバーであったジョン・J・マシューズ（John J. Mathews）とその妻マリー・アン・マシューズ（Marry Ann Mathews）を中心に，独立系ハワイ人教会「ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラ（Hoomana O Ke Akua Ola）」が活動を開始する（Beaglehole 1937；Aiona 1959）。1911 年には母教会のカ・マクア・マウ・ロア（Ka Makua Mau Loa）教会が建立され，1916 年 12 月 29 日に彼らの教団は宗教団体として公認された[43]。一方，マシューズ自身は，1911 年 8 月 15 日付で他の 4 名の牧師

42) Pukui et al.（1972 b：239-265）は，「罪」や「悔悛」の概念もハワイ文化にとって全く異質なものではなかったと，土着の類似概念に言及しながら示唆している。だが，この問題については，より慎重な考察が必要とされるというのが，筆者の見解である。

43) *Official Letter on Dec.29, 1916. Hoomana O Ke Akua Ola.* Department of

と共にホオマナ・ナアウアオを除名されている[44]。

ところで，この教会の設立メンバーの中にジョン・H・ワイズ（John H. Wise）がいた。カメハメハ学校の卒業生でもある彼もホオマナ・ナアウアオのメンバーであったといわれるが，この独立系教会に加わる以前は，HEA によって米国本土のオベリン大学に留学生として派遣されていた。1893 年に彼はハワイに戻り，カウマカピリ教会の教区で HEA のハワイ人牧師と宣教活動を開始する（F 1893/8）。しかし，間もなく，彼は HEA が白人指導者に支配されていることに不満を感じて脱会したのであった（HSB 1970/10/17）。

ワイズは，1919 年 12 月 20 日にホオマナ・オ・ケ・アクア・オラの筆頭牧師に選ばれ，以後この独立系教会は，彼の強力な指導のもと，その勢力を徐々に拡大していく。一方，創立者であったマシューズは教会内での主導権争いに敗れたのか，後にホオマナ・ナアウアオに戻り，1932 年には同教団の補佐牧師についている。

ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラも，ホオマナ・ナアウアオ同様，幾つかの支教会を各地に持つことになるが，その中には母教会から独立するものも現れた。母教会から独立し現在も活動を続ける教会には，確認できているものとして，ラナキラ（Lanakila）教会，エカレシア・オ・カ・マウナ・オ・オリベタ（Ekalesia O Ka Mauna O Oliveta），ケ・アリイ・オ・ナー・アリイ・アー・メ・カ・ハク・オ・ナー・ハク（Ke Ali‘i O Nā Ali‘i Ā Me Ka Haku O Nā Haku），ケ・アリイ・オ・カ・マル（Ke Ali‘i O Ka Malu）などがある。いずれも 1930 年代から 40 年代にかけて，ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラから独立した教会であり，母教会は全てオアフ島にある。このうち，ケ・アリイ・オ・ナー・アリイ・アー・メ・カ・ハク・オ・ナー・ハクとラナキラ教会は他島に支教会を有する。

現在の各教会の規模にはかなりの差がある。最大規模の教会は，ホオマナ・

Commerce and Consumer Affairs.

44) *Official Letter on Aug.15, 1911. Hoomana Naauao O Hawaii.* Department of Commerce and Consumer Affairs.

オ・ケ・アクア・オラで，母教会の下に5つの支教会があり，全信徒数は約1,500名，そのうち母教会の信徒数が約1,000名とされる。ホオマナ・ナアウアオには，5つの支教会があり，全信徒数は約890名で，そのうち母教会の信徒数は215名であるが，筆者の調査中にある支教会の約300名の信徒が脱会し独立した。ラナキラ教会の全信徒数は約300名で，うち母教会の信徒が9割近くを占め，残りの1割がマウイ島にある支教会の信徒である。ケ・アリイ・オ・ナー・アリイ・アー・メ・カ・ハク・オ・ナー・ハクは，その母教会の信徒数が約150名だが，他の5つの支教会の信徒数は不明である。エカレシア・オ・カ・マウナ・オ・オリベタは，信徒数は1959年の時点で106名（Aiona　1959：43），現在も100名以上の信徒を有するという，親族を中心に構成された単一の教会である。ケ・アリイ・オ・カ・マルは，聖餐式には100名の出席者があるというが，筆者の参加した日曜礼拝の規模からすると数家族レベルの規模の教会と予想される。

［教義と儀礼］

ところで，「ジュビリー・ブック」から分析したホオマナ・ナアウアオの教義，すなわち「悔悛」の強調とそれを前提にした信仰治療の体系，およびその中で採用される無作為な聖句の選び出し（wehe i ka Paipala）と断食などの儀礼的行為についてみると，これらの独立系教会はそれぞれ異なった変遷・変容をたどっているようである。

例えば，Aiona（1959）は，1950年代の時点で，ホオマナ・ナアウアオとホオマナ・オ・ケ・アクア・オラとの間で，信仰治療の手続きが異なっていることを指摘している。前者では，依頼者はまず教会のメンバーになることを要求され，通常はwehe i ka Paipalaによって原因を探り問題解決をはかり，断食や夢身はより深刻な問題の場合にのみ使用されたのに対し，後者では，患者は教会のメンバーにならなくてもよく，普段は断食と夢見が問題解決のために使用され，wehe i ka Paipalaはより深刻な問題に直面した際に使われたのであった（Aiona 1959：31－32）。

ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラの場合，1978年に現在の筆頭牧師を選出

する際，各教会の牧師・役員らが断食して見た夢を解釈して選んだという。また，現在も一年の最初の3週間は断食の期間（Pule Hāmau）と定められている。一方，ホオマナ・ナアウアオの場合，個人的な断食でさえも，「十数年前誰それがわけあって断食していたのを覚えている」というように過去形で語られることが多い。現在の両教会の断食の捉え方の違いは，先にあげたAiona（1959）の指摘やブライトの証言（Burrow 1970［1947］）とある程度整合性があるように思われる。

また，問題解決に向けての儀礼的方法としてho'oponopono[45]を教会レベルで公式に行っている独立系教会もあるが，この宗教的行為は他の宗派のハワイ人キリスト教徒の間でも行われていることもあり，また，名称は同じでもその内容に隔たりがあるのも事実である（cf. Paleka 1995）。

これらのハワイ人教会は独立系のプロテスタントを名乗っているものの，彼らの間では会衆派の流れをくんでいるという意識はそれほど強くない。しかし，日曜礼拝を初め様々な集会活動やその他の儀礼は，一般にハワイにおける会衆派教会の伝統を色濃く残していると考えて良いだろう。

ま と め

本稿では，19世紀のハワイにおいて，ハワイ人たちがどのようにキリスト教に反応し，この外来宗教を取り込んでいったかを，カオナの反乱とホオマナ・ナアウアオの誕生を通して考察した。太平洋諸島の様々な民族史学的研究では，18世紀から19世紀にかけての文化接触の際に，島民達は一方的，受動的に西洋文化の影響を受けたわけではなく，彼らも彼らの仕方で外来文化

45）家族や親族が集まって，神に祈り，討議を重ね，互いに罪を告白したり許しあったりすることで，人間関係の修復を行ったり，その他の問題を解決する，一種のカウンセリング療法である（Pukui et al. 1972 a：60-70）。西洋と文化接触する以前から行われていた慣習であったが，キリスト教化以降も，キリスト教の教義体系を受容しながら現在に至るまで家族の中で行なわれてきた。現在は，ho'oponopono のセッションの中で wehe i ka Paipala が行われることが多い。

と接触し，それを取り込んでいった点が指摘されるが[46]，ハワイ人のキリスト教の受容についてもそれが当てはまる。

カオナの反乱を率いたカオナとホオマナ・ナアウアオを設立したケキピは，同時代に生きたキリスト教徒のハワイ人であるが，彼らの起こした宗教運動，すなわちキリスト教の土着化には，共通する点だけでなく異なる点も多い。最後に，その共通点および相違点を整理し，ケキピの率いる独立系ハワイ人教会が宗教組織として成立し存続した理由について言及したい。

カオナとケキピの宗教運動に共通するのは，まず第一に，両者とも会衆派教会の内部で活動を展開し，ハワイ人の教会活動における主権を主張した点である。カオナはラナキラ教会でパリス牧師と共に日曜礼拝を指導するリーダーであり，ケキピもカラーヒキオラ教会でボンド牧師に認知された有力なメンバーであった。しかし，彼らがキリスト教を自分たちのものにしようとする行為は，白人牧師によって正当なキリスト教から逸脱する異端的・呪術的行為とみなされた。また，彼らの宗教活動において最も重要であったものは，ハワイ語聖書とその中に書かれている言葉であった。カオナが運動の初めに大量のハワイ語聖書を集め，その信者達が肌身離さずそれを身に付けていたこと，ホオマナ・ナアウアオの重要な儀礼の一つが wehe i ka Paipala であったことを考えれば，彼らにとってのハワイ語聖書の重要性は明白である。聖書はハワイ語に翻訳されることでハワイ人によって自由に解釈され，自らの信仰を確立するための道具として使われたのであった。

また，ハワイ文化に馴染みの深い夢見・啓示，信仰治療を通して，その宗教活動を展開したことも，カオナとケキピ，そしてポロアイレフアの活動の共通点として上げることができる。彼らの夢見や信仰治療に，キリスト教受容に際してハワイ文化が一方的に抑圧されるのではなく，逆に発揚される形

46) Davidson (1966) が，ヨーロッパ中心主義の歴史観を脱して太平洋諸島を中心にすえた歴史学の提唱を行って以来，この地域の文化接触の歴史について相対的な視点に基づいた詳細な事例研究が行われてきた。だが，太平洋諸島の歴史学をどのように脱植民地化するかについては，幾つかクリアしなければならない問題がある（cf. Meleisea 1978； Thomas 1990)。

で展開された点を認めることができよう。

一方，カオナとケキピの運動で異なる点としては，まず第一に，前者は指導者の具体的な預言に従う典型的な千年王国運動であったのに対し，後者において指導者の受けた啓示は預言的なものではなく信仰や運動の方向性を示すものであって，その運動の性格は，後にハワイアン・クリスチャン・サイエンスと呼ばれたように，信仰治療を強調するキリスト教系の新宗教団体の性格を帯びていたことが上げられる。更に，前者はより政治的・経済的な運動，反乱へと短期間で変容したのに対し，後者は政治的運動体とはならず非営利団体の宗教組織として設立された点にも注意を払うべきだろう。これは，カオナと異なり地方の農場主であったケキピは，王室周辺のハワイ人との交友関係もあり，経済面で窮することがなかったこととも関係していると思われる。

結局，カオナの宗教運動は狂信者達の反乱として鎮圧され失敗に終わったのに対し，ケキピの運動は当初より異端視されはしたものの，徐々に勢力を拡大して安定した宗教組織となり，一時は HEA が対抗勢力として批判せざるを得ないほどの規模を誇る教団となった。ところで，彼の教会が会衆派からの独立に成功したのは，19 世紀末のハワイ社会の状況に依存する部分も多い。まず，王室の HEA 離れに伴い，会衆派教会の影響力がハワイ人の間で弱まり，更に，いわゆる「宣教師一派」による王朝の崩壊は一部ハワイ人信徒の HEA 離れを決定的にした。また，19 世紀後半，カフナに公式免許が発行されたことが示すように，ハワイ人にとって享受しやすい医療の重要性が増しており，ケキピの信仰治療を中心にすえた活動が社会のニーズに合致した。また，19 世紀中盤とは異なり，19 世紀末から 20 世紀初頭はキリスト教他宗派を含めた諸宗教が活動を展開していた時期であり，ホオマナ・ナアウアオもそのうちの一団体に過ぎず，HEA の批判が集中しなかった。19 世紀末になると会衆派教会の文化が一般にハワイ人の間で定着し，教会外での家族礼拝や集会などがハワイ人の独自の宗教活動を促進した点も見逃してはならない。以上の点をホオマナ・ナアウアオの独立を可能にした背景として考えることができるだろう。

本稿では 19 世紀後半に会衆派教会の外に出て運動を展開したハワイ人信徒の歴史的事例を考察した。しかし，当然のことながら会衆派教会の内に留まったハワイ人も存在し，彼らの方がむしろ多数派であった。この会衆派の伝統内に留まったハワイ人信徒がどのようにキリスト教を受け入れていったかを民族史学的に考察すること，および，会衆派教会の内と外で今日のハワイ人キリスト教徒がどのようにキリスト教とハワイ文化という 2 つの文化をとらえているかを考察することが，今後の研究課題となるだろう。

参考文献

Aiona, D. L.

1959 *The Hawaiian Church of the Living God: An Episode in the Hawaiian's Quest for Social Identity.* A Thesis for MA, University of Hawaii.

Beaglehole, E.

1937 *Some Modern Hawaiians.* Honolulu: University of Hawaii.

Bicknell, J.

c1890 *Hoomanamana — Idolatry.* n.p.

Burrows, E. G.

1970[1947] *Hawaiian Americans: An Account of the Mingling of Japanese, Chinese, Polynesian, and American Cultures.* Hamden: Archon Books.

Chapin, H. G.

1984 "Newspapers of Hawai'i 1834 to 1903: From "He Liona" to the Pacific Cable." *The Hawaiian Journal of History* 18:47-86.

Davidson, J. W.

1966 "Problems of Pacific History." *The Journal of Pacific History* 1:5-21.

Daws, G.

1968 *Shoal of Time: A History of the Hawaiian Islands.* Honolulu: University of Hawaii Press.

Dibble, S.

1909 [1843] *A History of the Sandwich Islands.* Lahainaluna: Press of the Mission Seminary.

Emerson, O. P.

1895 *Address of the Retiring President. In* Forty-Third Annual Report of the Hawaiian Mission Children's Society.

石森秀三

1982 「ニュージーランド・マオリの民族主義運動－脱部族化とキリスト教－」 中牧弘允編『神々の相克：文化接触と土着主義』新泉社, pp.257-287.

Gallagher, M. E.

1983 *No More A Christian Nation: The Protestant Church in Territorial Hawai'i, 1898-1919.* A Dissertation for Ph.D, University of Hawai'i at Mānoa.

Garrett, J.

1982 *To Live Among the Stars: Christian Origins in Oceania.* Suva: University of the South Pacific.

HMCS (Hawaiian Mission Children's Society)

1969 *Missionary Album: Portraits and Biographical Sketches of the American Protestant Missionaries to the Hawaiian Islands.* Enlarged from the Edition of 1937. Honolulu: Hawaiian Mission Children's Society.

Howe, K. R.

1984 *Where the Waves Fall: A New South Sea Islands History from First Settlement to Colonial Rule.* Honolulu: University of Hawaii Press.

中島弓子

1993 「ハワイ・さまよえる楽園：民族と国家の衝突」東京書籍

Kamakau, S. M.

1964 *Ka Po'e Kahiko: The People of Old.* Honolulu: Bishop Museum Press.

Kodama, M.

1974 *Kaona Insurrection of 1868: Its Background and Analysis : A Study of a Hawaiian Nativistic Movement.* course paper, University of Hawai'i at Mānoa.

Kuykendall, R. S.

1938 *The Hawaiian Kingdom Volume I: Foundation and Transformation.* Honolulu: University of Hawaii Press.

1953 *The Hawaiian Kingdom Volume II: 1854-1874 Twenty Critical Years.* Honolulu: University of Hawaii Press.

1967 *The Hawaiian Kingdom Volume III: 1874-1893 The Kalakaua Dynasty.* Honolulu: University of Hawaii Press.

Lind, A. W.

1952 "Religious Diversity in Hawaii." *Social Process in Hawaii* 16: 11-19.

Lindstrom, L.

1993 *Cargo Cult: Strange Stories of Desire from Melanesia and Beyond.* Honolulu: University of Hawaii Press.

Malo, D.

1951 *Hawaiian Antiquities (Emerson, B. Nathaniel, Trans.).* Second Edition. Honolulu: Bishop Museum.

Meleisea, M.

1978 "Pacific Historiography: An Indigenous View." *The Journal of Pacific Studies* 4:25-43.

Mookini, E. K.

1974 *The Hawaiian Newspapers.* Honolulu: Topgallant Publishing Company, Ltd.

Morris, N. J.

1987 *Hawaiian Missionaries Abroad, 1852-1909.* A Dissertation for Ph.D, University of Hawai'i at Mānoa.

Morrison, M.

1984 *Ka Ho'omana Na'auao: The History of an Early Hawaiian Church: A Translation from the Original Hawaiian Language.* course paper, University of Hawai'i at Mānoa.

Paleka, H. M.

1995 *The Fusion of Hawaiian Traditional Religion and Missionary Christianity.* A Thesis for MA, University of Hawai'i at Mānoa.

Pukui, M. K., Haertig, E. W., & Lee, C. A.

1972a *Nānā I Ke Kumu (Look to the Source), Volume 1.* Honolulu: Hui Hanai, Queen Lili'uokalani Children's Center.

1972b *Nānā I Ke Kumu (Look to the Source), Volume 2.* Honolulu: Hui Hanai, Queen Lili'uokalani Children's Center.

Ralston, C.

1985 "Early Nineteenth Century Polynesian Millennial Cults and the Case of Hawai'i." *The Journal of the Polynesian Society* 94(4): 307-331.

Schmitt, R. C.

1977 *Historical Statistics of Hawaii.* Honolulu: The University Press of Hawaii.

Swain, T., & Trompf, G.

1995 *The Religions of Oceania.* New York: Routledge.

Thomas, N.

1990 "Partial Texts: Representation, Colonialism and Agency in

Pacific History." *The Journal of Pacific History* 25(2):139-158.

Walsh, A.

1993 "Congregational Influences in Hawaii (1820-1893)." *New Conversations* 15(1):23-43.

史　　料

以下に示すのは，本論文中で参照した一次資料である。ただし，新聞，機関誌，書簡などについては，そのうちどの版を使用したかは，明記していない。

The Annual Report of the Board of the Hawaiian Evangelical Association. Hamilton Library, University of Hawai'i at Mānoa.

*Bond, Elias., Memoranda (Vol.*III *1881-), The Journal Collection, 1819-.* Hawaii Mission Children's Society Library.

Buke Hai Euanelio O Ka Hoomana Naauao No Ka Piha Ana O Na Makahiki Iubile He Kanalima Aperila 16, 1853-Aperila 16, 1903. n.p.

The Friend. Hamilton Library, University of Hawai'i at Mānoa.

Hawaiian Gazette. Hamilton Library, University of Hawai'i at Mānoa.

Honolulu Star-Bulletin. Hamilton Library, University of Hawai'i at Mānoa.

Kekipi, J. E., 1883-1885, H. E. A. Archives. Mission Houses Museum Library Collections of the Hawaii Mission Children's Society.

Official Letters. Hoomana Naauao O Hawaii. Department of Commerce and Consumer Affairs.

Official Letters. Hoomana O Ke Akua Ola. Department of Commerce and Consumer Affairs.

Pacific Commercial Advertiser. Hamilton Library, University of Hawai'i at Mānoa.

Supplement to the Friend. Hamilton Library, University of Hawai'i at Mānoa.